

滋賀県立大学 地域共生センター 年報 2020



目次	1
1 地域共生センター年報 2020 発行にあたって	2
【特集】コロナ禍の取組	3
2 事業紹介	
2-1 事業一覧	
2-1-1 地域課題の解決と地域共生等に関する教育および研究	6
2-1-2 地域における人材育成等	7
2-1-3 地域との連携および交流	7
2-1-4 生涯学習	7
2-1-5 他大学等の連携	7
2-2 地域教育プログラム	
2-2-1 関連科目の履修登録状況	8
2-2-2 地域共生論	8
2-2-3 地域基礎科目	8
2-2-4 地域志向科目	9
2-2-5 近江楽士（地域学）副専攻	9
2-2-6 近江環人地域再生学座	11
2-2-7 近江楽座	12
2-3 SDGs 地域化拠点の取組	
2-3-1 SDGs に関する取組の全体像	16
2-3-2 キャンパス SDGs びわ湖大会 2020	16
2-3-3 教育、研究、地域への波及	19
2-4 コロナ禍の学生への食糧支援の取組	
2-4-1 概要	22
2-4-2 教職員等の寄付による支援	22
2-4-3 県大フードロス削減アクション ー規格外野菜配布による支援の取組ー	23
2-5 地域連携	
2-5-1 地域連携相談窓口の相談対応	24
2-5-2 県内自治体等との連携	25
2-6 生涯学習	
2-6-1 公開講座	26
2-6-2 公開講義	26
2-7 他大学等との連携	
2-7-1 環びわ湖大学・地域コンソーシアム	27
2-7-2 大学サテライト・プラザ彦根	27
2-7-3 びわ湖東北部地域連携協議会	27
3 スタッフ紹介	
3-1 地域共生センターの体制等	28
3-2 教職員の活動	29
3-3 2021 年度の教職員メッセージ	32

1 地域共生センター年報 2020 の発行にあたって

地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する滋賀県立大学で地域連携の中心的な役割を担う地域共生センターにとっても、令和2年(2020年)度は新型コロナウイルス感染症対策に追われ、これまでの取組が出来ず試行錯誤をしながらの一年となりました。

新型コロナウイルス感染症に関しては、感染拡大を踏まえ令和2年4月7日に東京都、大阪府など7都府県に緊急事態宣言が発出された後、同月16日には全国に拡大され、5月14日に東京都、京都府、大阪府、兵庫県など8都道府県を除き本県など多くの県では解除され、同月25日にすべてが解除されました。しかしながら、翌令和3年1月8日に京都、大阪、兵庫を含む11都府県に緊急事態宣言が再度発令され東京など首都圏では3月21日まで継続されました。

このような事態を受け、本学では令和2年度前期授業は5月から遠隔授業での遅れたスタートを余儀なくされ、10月からの後期授業も対面で始まったものの、1月途中からは遠隔授業になりました。地域教育においても、グループワークや講師との意見交換などを中心とする講義が多いことからこれまでにない対応を迫られました。テキストや講師の動画を活用しながら提示した課題に対するレポート提出、質問への回答などにより学生の学びを確保しようと努めました。また、実施時期を前期から後期に後ろ送りした科目もありました。

特に地域貢献を目的とする学生主体の地域活動を全学的に支援する「近江楽座」は、地域での感染防止のため活動に大きな制約を受けスタートも9月と遅れました。新型コロナウイルス感染症感染予防の活動指針を定め、それを踏まえて事前に活動計画の提出を求め、承認した上での活動となり、これまで通りの活動はできませんでしたが、学生の皆さんが現状を踏まえて考え、工夫をした活動を行ってくれました。

また、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けても、

新型コロナウイルスは更なる試練を与えました。残り10年となった2030年のゴールに向けて、現状では想定できない新たな課題が今後も惹起する可能性があり、目標達成への困難さを警告したものと考えています。本学としてもSDGsの地域化拠点の役割を果たすべくこれまで以上にSDGsにしっかりと向き合い取組を強化して参ります。

令和2年度は、キャンパスSDGsびわ湖大会2020をオンラインで開催することで視聴回数が875回を数えるなど広く多くの方々にご参加頂くことが出来ました。

生涯学習については、これまで多くの方に本学で受講頂いた公開講義や公開講演ができないなど大きな影響を受けました。一方で、オンデマンドで本学教員による3回シリーズの講演を視聴できる取組では、幅広い年齢層や遠隔地からの視聴申込みもあり307人の方にご覧いただくことが出来ました。

このように、コロナ禍の中で、WEB活用によるより効果的な方法が確認でき、今後も積極的な活用を考えていきたいと思っています。

令和3年に入っても、幾度も緊急事態宣言が繰り返されるなど、新型コロナウイルス感染症の影響は先を見通せない状況ですが、この機会にニューノーマルな教育、研究、地域貢献のあり方を真剣に考えて、地域の活性化に貢献して参りたいと思います。皆様方の益々の御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年1月

地域共生センター

センター長 高橋滝治郎

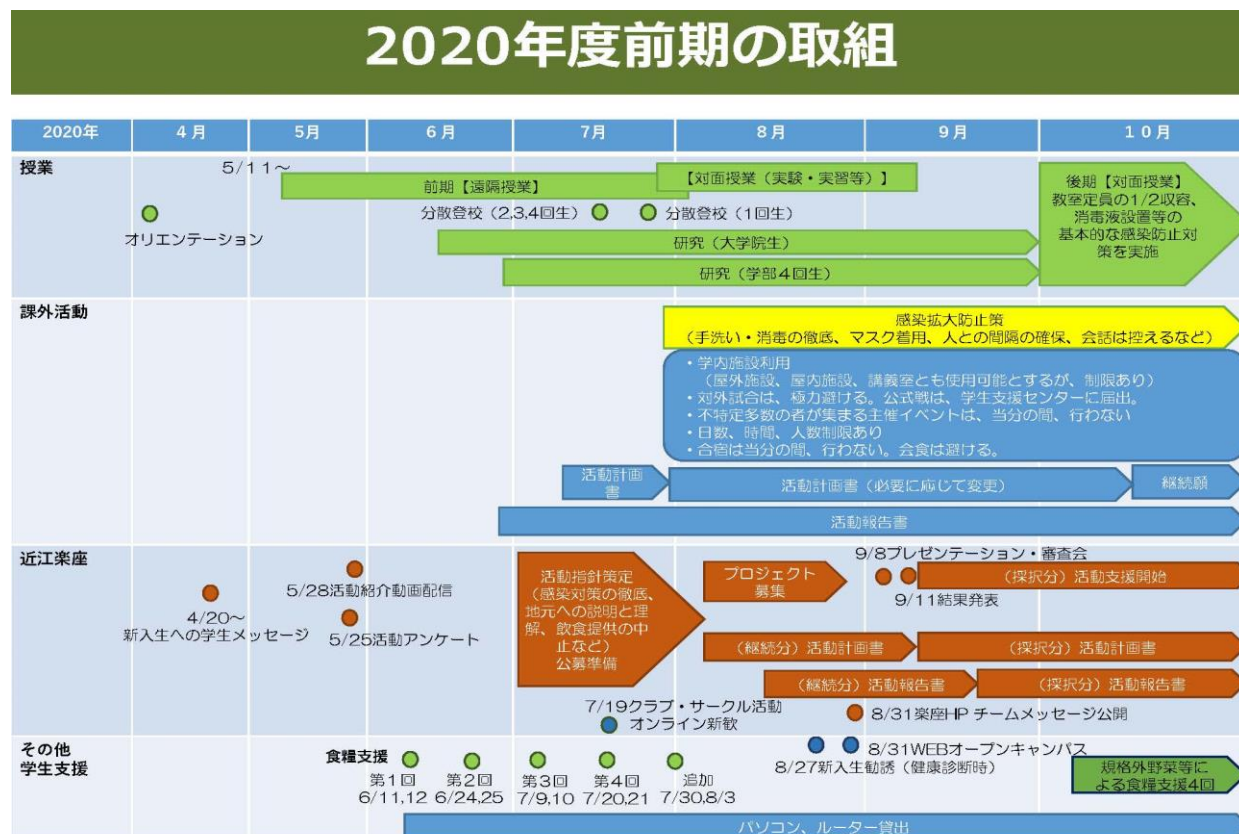
【特集】 コロナ禍の取組

令和2年度コロナ禍の大学の対応

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、令和2年4月16日には全国的に緊急事態宣言が発せられた。このため、令和2年度前期の講義は5月11日から遠隔授業でのスタートとなった。7月下旬からは実験・実習などに限って対面授業が再開されたが、全面的な対面授業の再開は10月の後期からとなった。後期授業は教室定員の1/2収容や消毒液設置等の基本的な感染防止対策を講じた上で対面でスタートしたが、令和3年1月に本県近隣の愛知、岐阜両県、京都、大阪両府に再度緊急事態宣言が適用され滋賀県においても新型コロナウイルス感染症のステージが警戒ステージとなったことから、1月18日から原則遠隔授業に切り替わった。

このような中、近江楽座を含む学生の課外活動も活動停止を余儀なくされ、感染状況も落ち着いてきた令和2年8月から活動指針を策定し、活動計画書の提出、承認を経た上で、制限付きで活動が再開され、近江楽座については8月にプロジェクト募集、9月8日にプレゼンテーション・審査会を行いスタートとなった。

このように大学の教育、研究、地域貢献活動に大きな影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症であるが、一方でオンラインを活用した新たな取組などが一気に進展した。このため、講義や学生生活、生涯学習など各分野でウィズコロナ、アフターコロナにおいてもこれまでの手法を見直し、より効果的、効率的なあり方に転換していく大きな契機となったものと言える。



コロナ禍での地域共生センター事業

1 地域教育プログラム

(1) 地域共生論

教育面では、特に1年次前期の全学生必修科目である「地域共生論」は大きな影響を受けた。600人以上が履修し、各回グループワークも交えて議論することで、他者を理解し、共感と豊かな対話を可能とするコミュニケーション力向上を目指す科目であるため遠隔授業のあり方を工夫し、テキスト「地域共生論」を活用しつつ毎回授業内容を配信し、主にコミュニケーション力の要素である「他者の立場に立って思いやる」課題を与え、レポート提出を課した。本授業の特徴である少人数のグループワークができず難しい部分もあったが、学生からはコミュニケーションの大切さ、地域との共生について考えられたとの感想も出された。(8ページ参照)

(2) それ以外の科目

県内で活躍する企業人、地域人などを講師とする「コミュニティとライフデザイン」、「地域企業講座」は予め収録した映像の配信や企業作成の動画なども活用し企業をリサーチするスキルを身につける方法などを含む講義とした。また、社会課題についての考え方の手法を学ぶ「システム思考法」は学生の自主的な小グループでの意見交換も取り入れ、「滋賀県立大学での学生生活を充実させるために」のテーマについての提案書をまとめた。さらに、多様なゲスト講師を招く「SDGsと滋賀のグローバルイノベーション～近江の暮らしとなりわい～」や現地でのフィールドワークを含む「地域デザインA」は後期実施に変更しオンラインも併用した授業とした。(9～11ページ参照)

(3) 近江環人地域再生学座

令和元年度からリモートでの授業のシステムを整備していたため、通常の講義は遠隔実施で特に支障はなかつ

たが、実践現場研修については実施時期を通常より遅らし、新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着いた後期に実施した。(11ページ参照)

(4) 近江楽座

新型コロナウイルス感染症の影響で、近江楽座プレゼンテーションは9月に延期された。その後の活動も、感染防止対策行動指針に基づき月ごとに予め活動計画を近江楽座事務局に提出し承認を得られたものから実施し、翌月に活動報告の提出を求めた。

学生は基本的な感染防止対策の実施を前提に、関係する地元の皆さんなどと協議し取組を行ったが、飲食の提供や地域の方と密に接するような活動の自粛などこれまでと同様の活動ができなかった。一方で、学生たちが話し合いオンライン活用など工夫し、①定例会議のオンライン化、②イベント等のオンライン開催、③ネットショップ開設、④アーカイブ作成、⑤広報動画作成、⑥インプットの充実、準備活動、⑦これまでの活動の振り返りなど、コロナ禍を契機として新たな活動に取り組んだ。(12ページ参照)

2 SDGsの取組

(1) キャンパスSDGsびわ湖大会2020

令和2年11月21日(土)に『「子ども・若者」と「大人」がともに歩むSDGsの10年』をテーマに実施したキャンパスSDGsびわ湖大会2020は、これまでの対面開催からYouTube Liveによるオンライン開催とした。これまで多くの参加者が県立大学につどい、活動発表、意見交換や交流をしていたが、残念ながらオンラインのため、対面での交流はできなかった。しかしながら、オンライン開催で県内外から広く参加があり、また開催日以降にオンデマンドで映像配信をしたことから視聴回数は延べ875回になるなど、対面にはないメリットも見い出せた。(16～18ページ参照)

（２）SDGs 連続講座

令和２年度はオンライン（Zoom を使用）で SDGs に関連する社会課題をテーマにした映画の上映会を開催し、上映後は、映画のテーマに関連する活動を実践されているゲスト講師によるショート講演、さらにグループ分けした連続講座参加者による感想や気づきを共有する情報交換の時間を取った。（19 ページ参照）

３ 学生への食糧支援

コロナ禍で生活に困っている学生や留学生支援のため地域共生センターが呼びかけ、食糧支援を行った。

年度前半は、多くの教職員をはじめ卒業生など諸先輩、地域の皆さんなどからも大きな支援を頂いた。6 月から 8 月にかけて計 5 回実施した食糧支援の結果、支援を受けた学生は延べ 983 名で、配布した食糧は精米 1,960kg をはじめ缶詰、レトルトカレー、地元産の玉ねぎ、じゃがいもなど多品目に及び多くの支援ができた。

年度後半には地域の農業法人さんのご協力で規格外で出荷できない農産物などを頂き、多くの学生に配布した。配布は 11 月から 12 月にかけて計 4 回取り組み、受け取った学生は延べ 584 人、配布した野菜の総重量は約 430kg となった。

このことは SDGs の推進に取り組んでいる本学としても、SDGs のターゲットの一つである食品ロス削減につながるもので令和３年度も引き続き取り組んでいる。（22～23 ページ参照）

４ 生涯学習

令和２年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、対面の取組は全て中止した。一方で、オンラインを活用した公開講座を他大学とも連携しながら実施した。その結果、対面と比較し、より幅広い年齢層や県外など広範なエリアからの参加があり、今後もオンライン配信の併用を進める。（26 ページ参照）

（１）春期公開講座

５月～６月に各学部から推薦された講師による４回シリーズの公開講座を予定していたが中止した。

（２）公開講座

令和２年度は前期公開講義を実施すべく参加者を募集し準備していたが中止し、後期もコロナ対策で安全の確保が見込めないため中止した。

（３）オンライン公開講座

人間文化学部中井均教授による「安土城の謎を解く」をテーマにした３部構成のオンライン講座を実施し令和２年度末まで YouTube 配信した。

（視聴回数 1,465 回）

（４）サテライト・プラザ彦根特別講演会

サテライト・プラザ彦根の事業として、令和３年３月 15 日に長浜市市民協働部学芸専門監太田浩司氏の「明智光秀の生涯と近江 ～大河ドラマ『麒麟がくる』では麒麟が来たか？」をテーマに特別講座会を本学が企画・実施した。なお、この講演会は感染防止のため会場参加者を定員の半以下の 27 名とし、希望者には YouTube 配信した。（視聴回数 149 回）

（５）びわ湖東北部地域連携協議会市民教養講座

びわ湖東北部地域連携協議会主催のオンライン配信による市民教養講座が実施され、本学からは環境科学部丸尾雅啓教授、人間文化学部中井均教授が参画した。

2 事業紹介

2-1 事業一覧

2-1-1 地域課題の解決と地域共生等に関する教育および研究

1. 地域教育プログラム

(1) 地域共生論

1 年次の全学部学生約 600 人が学部の枠を超えてグループワークを通じ、一緒に学ぶ必修講義。各学部から提供されるテーマをもとに、地域共生の意義を理解し、自ら率先して地域における活動等を実践することの大切さを学ぶとともに、学生が SDGs の視点も交えて考え、他者を理解し、共感と豊かな対話を可能とするコミュニケーション力向上を目指す。

(2) 近江楽士（地域学）副専攻

全学・全学科対象の未来志向の学びのプログラム。実社会に必要なノウハウを地域から学び、主体的に考え、行動し、課題を解決するための学びを提供する。

コミュニティ・ネットワーク（CN）コースは、地域を客観的に分析し、人材や資源を結び合わせて地域再生に向けた取組をデザインするネットワーク力を身に付ける。ソーシャル・アントレプレナー（SE）コースは、起業家的精神をもって地元企業等でリーダーシップを発揮する起業力を身に付ける。

この副専攻を修了し所属学部の卒業要件を満たすことで「近江楽士（コミュニティ・ネットワーク）」、「近江楽士（ソーシャル・アントレプレナー）」の称号が付与される。

(3) 近江環人地域再生学座

本学の大学院生や社会人を対象に、地域再生のリーダーとなる資質を有した人材「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」を育成するもので、研究科横断による枠組みで地域再生や地域活性化のため

の必要な知識と技能を総合的・体系的に習得できる副専攻カリキュラム。

なお、学座修了生を中心に結成された特定非営利活動法人コミュニティアーキテクトネットワーク（NPO 法人環人ネット）が、地域での活動連携や大学とのつなぎ役などで大きな役割を果たしていただいている。

(4) 近江楽座

地域貢献を目的とする学生主体の地域活動を全学的に支援（活動助成・コンサルティング・情報発信と共有）する教育プログラム。平成 16 年度に文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」事業として実施し、平成 19 年度からは本学の独自予算で継続している。事業の目標としては、①地域の課題に学生・大学が取り組み、地域の活性化に向けて共に行動する、②学生が地域の方々と一緒に行動することにより、学内だけでは学べないことを体験する、③大学と地域が共同してよりよい地域づくり・人づくりにつながる仕組みをつくる、の3つがある。毎年 20 を超えるプロジェクトがまちづくり、健康福祉医療、環境保全、農業振興、被災地支援など様々な分野で、県内外、海外までもフィールドにして活動が続けている。



廃棄物バスターズ：南三ツ矢公園での清掃活動イベント

2. SDGs 達成に向けての取組

世界共通の目標である SDGs に関しては「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」大学として、SDGs の地域化拠点を目指して平成 30 年に滋賀県立大学 SDGs 宣言をした。

主な取組は、前記 1 に記載の様々な地域教育プログラム、SDGs 特化型地域課題研究、キャンパス SDGs びわ湖大会、県大 SDGs シネマ、出前講座のほか、地域の人材育成のための研修事業などにも取り組んでいる。

3. 地域づくり等調査研究

本学の知的資源を生かし、自治体、NPO、経済団体等と連携し受託研究を実施している。

○地域共生センターの連絡先

滋賀県立大学地域共生センター

TEL : 0749-28-9851 FAX : 0749-28-0220

e-mail : chiiki_koken@office.usp.ac.jp

2. 市町等との包括連携協定

「地域貢献」を取組の大きな柱とする本学として、県内各市町と地域の課題や特性等を踏まえた具体的な連携・協力関係や体制を明確にし、組織的な連携を推進するため包括連携協定の締結を進め、随時意見交換を行っている。また、関係団体とも連携協定を結び、取組を推進している。

2-1-2 地域における人材育成等

1. 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)の継承

平成 27 年度から文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」に本学と県内 5 大学、関係団体の連携のもと取り組み、地域活性化に向けて地域で活躍する人材の育成と地域の雇用拡大、若者の地元定着を図ってきた。本事業は令和元年度に終了したが、本学では前記 2-1-1 の 1 に記載の近江楽土(地域学)副専攻ソーシャル・アントレプレナー(SE)コースを継続実施するとともに、中期インターンシップやジョブ交差点などを実施することとしている。

2. その他の人材育成事業

前記 2-1-1 の 1 「地域教育プログラム」における学生や社会人教育の取組、前記 2-1-1 の 2 「SDGs 達成に向けての取組」に記載のとおり、地域において SDGs の視点も持って活躍する人材育成のための研修事業などを実施している。

2-1-3 地域との連携および交流

1. 地域連携相談窓口の設置

平成 30 年度より地域共生センターに地域連携相談窓口を設けて、県や各市町、関係団体等からの大学との連携相談に一元的に対応し学内各学部との調整等に当たっている。

2-1-4 生涯学習

人生 100 年時代と言われ、地域住民の生涯学習への多様なニーズに対応することも本学の使命である。①春期公開講座、②社会人専門講座、③公開講演、④公開講義など、地域に貢献する本学として、社会情勢の動きや受講生の声を踏まえながら関係教員の協力を得て本学の有する知的資源をもとにこれら生涯学習支援の取組の充実を図っている。

2-1-5 他大学等の連携

1. 環びわ湖大学・地域コンソーシアム

県内 14 大学と県、市町、関係団体で構成される環びわ湖大学・地域コンソーシアムの大学地域連携事業に、本学学生の参加を呼び掛けながら取組を進めている。

2. 大学サテライト・プラザ彦根

彦根市内の 3 大学、株式会社平和堂、彦根商工会議所、彦根市が協働で運営し、単位互換講義の実施、講演会などを実施している。

3. びわ湖東北部地域連携協議会

びわ湖東北部地域の 5 大学、県、3 市、2 商工会議所、環びわ湖大学・地域コンソーシアムの連携によって、SDGs を活用した豊かに働き生活できるびわ湖東北部地域の創出に向けた各種の事業に取り組んでいる。

2-2 地域教育プログラム

2-2-1 関連科目の履修登録状況

地域教育プログラムの地域基礎科目、近江楽士（地域学）副専攻科目の開講科目および履修登録状況は次のとおり。

○ 地域教育プログラムの履修登録状況（R1、R2）

科目名	履修登録者数	
	令和元年度	令和2年度
地域共生論	649	633
地域コミュニケーション論	42+10	62
近江の歴史と文化	87	15*
地域社会福祉論	105	137
地域づくり人材論	155	155
びわこ環境行政論	12	107
多文化共生論	70	不開講
地域産業・企業から学ぶ社長講義	101	155
SDGs と滋賀のグローバルイノベーション～近江の暮らしとなりわい～	51+35	45
近江の美	116	不開講
世界遺産のまちづくり・人づくり	27	17
地域診断法	61	81
システム思考法	26	24
問題解決デザイン論	30	22
コミュニティとライフデザイン	11	14
MBA 入門	32	27
地域企業講座	18	24
地域デザイン A	14+12	47
地域デザイン B	8	3
地域デザイン C	8	3
地域デザイン D	1	9

※上記表で「+○」と記載のあるのは、COC+事業合同実施科目、環びわ湖大学・地域コンソーシアム単位互換科目による県内他大学生の数

※近江と歴史と文化は2020年度入学生より人間学科目に変更のため

め、2019年度以前入学生の履修登録者数。
※公開講義受講生は人数に含めていない。

2-2-2 地域共生論

「地域共生論」は、地域共生の意義を理解し自ら率先して地域における活動等を実践することの大切さを学ぶとともに、SDGsの視点も交えて考え、他者を理解し、共感と豊かな対話を可能とするコミュニケーション力向上を目指す1年次前期の全学生必修科目である。令和2年度前期はオンデマンド方式による遠隔授業となり、テキスト「地域共生論」を活用しつつ毎回授業内容を配信し、主にコミュニケーション力の要素である「他者の立場に立って思いやる」課題を与え、レポート提出を課した。本授業の特徴である少人数のグループワークができず難しい部分もあったが、学生からはコミュニケーションの大切さ、地域との共生について考えられたとの感想も出された。

また平成29年度から活用しているテキストを改訂し、令和3年度から新版の教科書を利用することとなった。

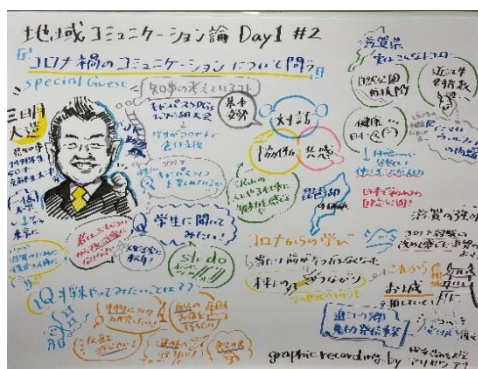
2-2-3 地域基礎科目

地域基礎科目は地域教育プログラムの基礎となる科目群で、全学共通の科目であり、全学部生は前記2-2-2の必修科目「地域共生論」のほか、選択必修科目から1科目以上選択必修する必要がある。

○ 地域基礎科目（選択必修科目）

科目	備考
地域コミュニケーション論	地域活動実践ターム実施
地域社会福祉論	
地域づくり人材論	
びわこ環境行政論	
多文化共生論	隔年開講（奇数年に実施）
地域産業・企業から学ぶ社長講義	
SDGsと滋賀のグローバルイノベーション～近江の暮らしとありわい～	地域活動実践ターム実施
近江の美	隔年開講（偶数年に実施）
世界遺産のまちづくり・人づくり	彦根商工会議所寄附講義
地域診断法	副専攻科目（CN 必修）
MBA 入門	副専攻科目（SE 必修）

地域基礎科目のうち「地域コミュニケーション論」では、コミュニケーションとは何か、地域社会でコミュニケーションが重要視される背景等について考えた上で、産官学様々な立場・現場で活躍する地域人との対話や共同作業を通じて、リアルな地域課題を地域に関わる皆で分かち合い、その解決策を立案するための基礎能力、コミュニケーションの基礎体力を養うことを目的とする。その中で滋賀県の三日月大造知事から「コミュニケーションとは何かーコロナ禍の今、改めて問う」と題して講演頂いた。授業ではグラフィックファシリテーションの技法を用いて、議論やアイデアを見える化する手法も学んだ。



2-2-4 地域志向科目

地域志向科目は、各学部学科の専門科目として提供されるもので、地域教育の一環として積極的に履修することを推奨している。

令和2年度は、環境科学部の「環境フィールドワークⅠ」など8科目、工学部の「材料科学実験Ⅱ」など2科目、人間文化学部の「環琵琶湖文化論実習」他10科目、人間看護学部の「人間看護学概論」他4科目が地域志向科目に位置付けられている。

2-2-5 近江楽士(地域学)副専攻

1. 人材育成イメージ、身につける力と科目構成

(1)コミュニティ・ネットワーカー(CN)コース

CNコースでは、①地域を客観的に分析し、人や資源を結び合わせて地域再生に向けた取組をデザインする人材、②行政やNPO、市民活動等の分野でリーダーシップを発揮する人材の育成を目指し、地域を題材に具体的に地域課題を解決できるノウハウを学んでいる。

○ CNコースの科目構成

科目	備考
地域診断法	必修
システム思考法	
問題解決デザイン論	
地域デザインA	選択必修
地域デザインB	

(2)ソーシャル・アントレプレナー(SE)コース

SEコースでは、①コミュニティビジネスの発想と手法によって地域課題を解決に導く起業的人材、②起業家精神をもって地元企業等でリーダーシップを発揮する人材の育成を目指している。

ビジネスの手法を用いた地域課題解決や将来の起業あるいは地域に根ざした新たなありわい創出に必要な知識、ノウハウ、心構えを学んでいる。

○ SE コースの科目構成

科目	備考
コミュニティとライフデザイン	必修
MBA入門	
地域企業講座	
地域デザインC	選択必修
地域デザインD	

2. 近江楽士の称号授与者

近江楽士（地域学）副専攻の各コースの所定の単位を修得し、所属する学科の修了要件を満たすとその修了が認められ、近江楽士の称号が授与される。

近江楽士コミュニティ・ネットワーカー（CN）称号授与者は平成 26 年度から、ソーシャル・アントレプレナー（SE）称号授与者は平成 30 年度から輩出している。

SE コース称号授与者の就職先は、大学院進学者を除いて、すべて滋賀県内となっており、地元定着につながっている。

○ 近江楽士称号授与者数の推移

称号	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
CN	16	12	10	3	23	17	5
SE	—	—	—	—	3	5	1
合計	16	12	10	3	26	22	6
実人数	16	12	10	3	23	19	5

3 特徴的な講義内容等

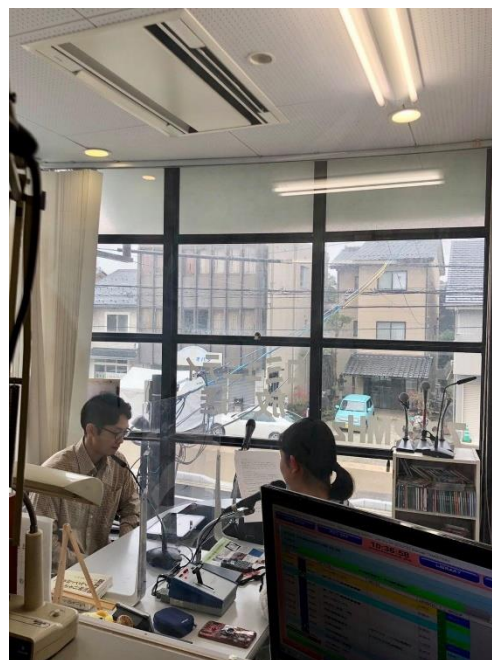
近江楽士（地域学）副専攻の座学では、両コースとも地域課題に関するグループワークを中心に行い、地域デザイン A～D の講義では現場に足を運んで、地域の方々の協力を得ながら実践的な学びを修得したが、令和 2 年度はコロナ禍の影響で地域デザイン A は現地でのフィールドワークを実施できず、オンライン等で現地と意見交換した。

○ 令和 2 年度の主な実践現場

科目名	学びのフィールド等
地域デザイン A	東近江市栗見出在家、大津市平野、大津市ナカマチ商店街、愛荘町ゆめまちテラスえちのオンライン等活用したフィールドワーク、提案発表
地域デザイン B	地域活動をテーマとした動画の制作で地域の情報発信のノウハウを学ぶ
地域デザイン C	彦根市石寺町における居場所づくりコミュニティカフェの企画、運営
地域デザイン D	SDGs をテーマとした FM ラジオ番組を FM ひこねとも連携して企画・制作・実施

令和 2 年度の「地域デザイン D」では、SDGs をテーマにした FM ラジオ番組の企画・制作・実施を体験することを通じて番組の企画・制作能力、交渉能力、聴く・話すなどのコミュニケーション能力さらには自らの情報を伝える発信伝達能力などの向上を目指すとともに、SDGs の理解を高めることを目的とした。18 回の放送ではそれぞれ SDGs に関わる活動を実施しているゲストを招き、受講者とのトークで番組を進めた。

なお、令和 3 年度はこの講義をもとに「県大ラジオ部」が結成され、活動を続けている。



ラジオ番組「ちかく de と〜くで SDGs」

○地元企業と連携した講義

「地域企業講座」では、地元企業経営者との対話を通じて、経営の実践的な知識を身につけるとともに、地元企業への理解を深め地元定着につなげる目的で、令和２年度前期はオンデマンド形式で多数の経営者等に登壇頂いた。

科目	登壇企業等名
地 域 企 業 講 座	エフォート行政書士事務所（大津市）
	(株)ミヤジマ（多賀町）
	大洋産業(株)（彦根市）
	宮川バネ工業(株)（東近江市）
	(株)PRO-SEED（彦根市）
	(株)しがぎん経済文化センター

「MBA 入門」では、企業や組織のマネジメント、ビジネスに関する知識やノウハウをビジネスゲームなどを通じて学び、併せて地元の企業等から具体的な経営戦略等の取組をもとにグループワークを実施した。

「MBA入門」の登壇企業等一覧（令和２年度）

科目	登壇企業等名
MBA 入 門	小川宗彦税理士・行政書士事務所（大津市）
	近江化成工業(株)（東近江市）
	丸三ハシモト(株)（長浜市）
	サパナ（大津市）
	ミナト経営(株)（草津市）

選択必修の地域課題科目の一つ「地域産業・企業から学ぶ社長講義」においても、次の地元企業等から登壇頂いた。

「地域産業・企業から学ぶ社長講義」の登壇企業等一覧（令和２年度）

科目	登壇企業等名
地域産業・ 地 域 か ら 学 ぶ 社 長 講 義	(株)Honki（大津市）
	フジテック(株)（彦根市）
	(株)日立建機ティエラ（甲賀市）
	(株)ゴーシュー（湖南市）
	山科精器(株)（栗東市）
	(株)平和堂（彦根市）
	日本電気硝子(株)（大津市）
	(株)日吉（近江八幡市）
	日本ソフト開発(株)（米原市）
	オブテックス(株)（大津市）

2-2-6 近江環人地域再生学座

近江環人地域再生学座は、湖国近江をフィールドに地域診断からまちづくり活動の実践まで、地域における多様な活動や挑戦のための知識・手法の教授を通じて、地域資源を活用した地域課題の解決や地域イノベーションを興し地域社会を切り拓くイノベーターやコーディネーターの育成を目指すプログラムである。

プログラムを修了し、検定試験に合格することで受講者には称号「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」が授与される。自治体職員、民間企業、NPOや自治会に所属する方、建築や都市計画の専門家など様々な所属・専門の人材が受講し、令和２年度末までに146名（うち大学院コース70名、社会人コース76名）が称号を獲得した。

令和２年度の称号授与者は社会人コースの4名である。同年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で大学の前期が遠隔授業となったため、前年度に整備した講義室内のWeb講義撮影用環境を最大限活用し、オンラインを主体とした講義を実施し、県内外のフィールドでの現場講義は、対面授業が再開した後期に実施した。

しかしながら、近江環人称号授与者で組織されている特定非営利活動法人コミュニティアーキテクトネットワーク（NPO法人環人ネット）との協働による交流会は中止となった。

令和２年度オンラインを活用した講義により受講が可能となったことは、本コース受講を目指す社会人にとって、対面、オンライン、対面とオンライン併用のハイブリッド型の3つの中から仕事のスケジュールに合わせた柔軟な選択により学びやすくなり、近江環人地域再生学座の特徴の一つとして、今後受講のPRに活用していく。



奈良市「清澄の里 栗」にて記念撮影

2-2-7 近江楽座

近江楽座の取組は平成16年度に始まり、令和2年度までの17年間で生まれたプロジェクトは延べ380件である。扱うテーマはまちづくりを始め、健康医療福祉、環境保全、農業振興、伝統文化の継承、被災地支援と広範で、活動地域も県内のみならず、県外や海外にまで及んでいる。

しかしながら、令和2年度地域での活動を主体とする近江楽座は、新型コロナウイルス感染症の影響を最も大きく受けた取組の一つと言える。前期授業が感染防止対策のため遠隔となったことから従来5月に実施していた近江楽座プレゼンテーションは9月に延期された。その後の活動も、感染防止対策行動指針に基づき月ごとに予め活動計画を近江楽座事務局に提出し承認を得られたものから実施し、翌月に活動報告の提出を求めた。

学生は基本的な感染防止対策の実施を前提に、関係する地域の皆さんなどと協議し安全にできることから取組を行ったが、飲食の提供や地域の方と密に接するような活動の自粛などこれまでと同様の活動ができなかった。一方で、制約のある環境の中で、学生たちが話し合いオンライン活用など工夫した新たな取組やこれまでの振り返り、再始動への仕込みなど、今後活動の幅がさらに広がるような次に記載の取組を行った。

【令和2年度の新たな取組の例】

○定例会議のオンライン化

「ボランティアサークル Harmony」など

- ・ 従来、代表、副代表のみ参加の地域の人との会合に、他のメンバーも参加し共通認識
- ・ 議事録等の資料を紙媒体から LINE グループで公開し、メンバー同士が容易に共有

○イベント等のオンライン開催

「田の浦ファンクラブ学生サポートチーム」

- ・ Zoom 活用した 3.11 キャンドルイベント

「Jesuit House Project」

- ・ オンラインでの設計提案（海外団体との連携）

「ボランティアサークル Harmony」

- ・ クリスマスコンサートを Zoom & YouTube Live 限定公開し、アーカイブで有効活用
- ・ 先輩たちも気軽に参加できる学習会を企画

○ネットショップ開設

「政所茶レン茶 “一”」

生産した政所茶のイベント等での対面販売の縮小への対応

○アーカイブ作成

「木興プロジェクト」「たけともミライ」

コロナ禍でフィールドでの活動ができない時期だからこそ集中して取り組めた。OBOG からも遠隔での技術指導を受けた。

○広報動画作成

「滋賀県大生き物研究会」

生態系保全の環境教育動画

「廃棄物バスターズ」

びわ湖放送と連携した地球温暖化防止啓発動画

○インプットの充実、準備活動

「Taga-Town-Project」

多賀町をもっと知る字めぐり企画

「おとくらプロジェクト」「とよさと快蔵プロジェクト」

メニュー考案、マニュアル作り、店舗改修等

○これまでの活動を振り返り、新たな活動に取り組む機会に

「未来看護塾」

先輩から医療現場や教育現場の実情の声を聴き、小学校での健康支援など新たな取組

「BAMBOO HOUSE PROJECT」

地域の方々とメール交換し、立ち止まって将来を見据えたプログラムの検討スタート

○ 令和2年度の主要なスケジュール

日程	行事
4月	新入生向けメッセージ、活動紹介をホームページ等で公開
8月6日	新型コロナウイルス感染拡大防止のための近江楽座活動指針 策定
9月8日	令和2年度プレゼンテーション・審査会
9月11日	プロジェクト活動開始
11月21日	キャンパス SDGs びわ湖大会 2020 活動発表

○ 令和2年度の採択プロジェクト一覧

プロジェクト名	活動エリア	関連団体
県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト	彦根市開出今町	県営開出今団地自治会、滋賀県
BAMBOO HOUSE PROJECT	湖南市菩提寺	菩提寺まちづくり協議会
未来看護塾	彦根市	彦根市立病院、特定非営利活動法人 NPO ぼぼハウス、どんぐり保育園
あかりんちゅ	彦根市・県外	滋賀教区浄土宗青年会
とよさと快蔵プロジェクト	豊郷町	NPO 法人とよさとまちづくり委員会
障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト（ボランティアサークル Harmony）	彦根市、東近江市他	NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー
子ども学習支援サポーターズ	彦根市・愛荘町	NPO 法人 Links
内湖の再生と水辺のコーディネート（滋賀県大生き物研究会）	彦根市神上沼他	彦根市愛西土地改良区
かみおかへ古民家活用計画 - SLEEPING BEAUTY -	彦根市上岡部町	上岡部町自治会、ベストハウスネクスト(株)
廃棄物バスターズ	彦根市・県内・県外	社会福祉法人いしづみ会、積水多賀化工(株)他
フラワーエネルギー「なの・わり」	彦根市	菜の花プロジェクトネットワーク
座・沖島	近江八幡市沖島町	沖島町離島振興推進協議会、沖島自治会
政所茶レン茶”ー	東近江市政所町	政所茶縁の会
とよさだプロジェクト	豊郷町	豊郷町役場
おとくらプロジェクト	彦根市高宮町	高宮連合自治会
Taga-Town-Project	多賀町	多賀町立文化財センター、桃原プロジェクト、YOBISHI 他
地域博物館プロジェクト（スチューデント・キュレーターズ）	米原市・高島市・近江八幡市	白谷荘歴史民俗博物館他
田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	宮城県南三陸町歌津地区田の浦、県内	NPO 法人田の浦ファンクラブ他
たけともミライ	宮城県気仙沼市	(株)高橋工業
Jesuit House Project	フィリピンセブ市	HO-TONG FOUNDATION、NPO 法人セブンスピリット
木興プロジェクト	宮城県南三陸町歌津地区田の浦	NPO 法人田の浦ファンクラブ

3 主なトピックス

(1) ボランティアサークル Harmony 文部科学大臣表彰を受賞

令和2年11月9日に令和2年度「障害者の生涯学習支援活動」にかかる文部科学大臣表彰を受賞した。これは、平成15年の結成から今日まで17年間「NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー」の専属ボランティアとして、障がい児・者の自立支援及び共生社会に向けての活動を行ってきたことが高く評価されたもの。また、令和3年1月15日に滋賀県の三日月大造知事に報告した。



滋賀県知事への受賞報告

(2) 県内の小中学校出前授業で実施

フラワーエネルギー「なの・わり」は令和2年10月14日に、草津市立渋川小学校でひまわりの種の搾油体験を実施した。小学生たちが収穫したひまわりをチームが所有する搾油機で油を搾る体験をし、身近にある植物がエネルギーになる様子を見て学習してもらった。

廃棄物バスターズは、彦根市立中央中学校1年生のSDGsに関する授業で、廃棄物バスターズの活動とマイクロプラスチック問題について紹介した。



フラワーエネルギー「なの・わり」

出前授業での搾油体験

(3) 「キャンドルイベント in 田の浦」のリモート開催

東日本大震災発災から10年目の節目となる令和3年3月11日、宮城県南三陸町の田の浦地区と滋賀の学生メンバーをリモートでつなぎ震災の追悼式を行った。これまでは学生たちが現地を訪問していたが、コロナ禍の中でWEBを活用した形式となった。この模様はYouTubeで配信し多くの人と共有できるように努めた。また、NHK 大津放送局の震災特集番組でも取組が放映された。



リモート開催の様子

(4) 地球温暖化防止、生態系保全啓発動画等の作成

廃棄物バスターズは、滋賀県地球温暖化防止活動推進センターと共同で啓発動画を作成し、YouTube にアップされた。また、びわ湖放送で廃棄物バスターズの活動を紹介するCMを作成、放映された。

滋賀県大生き物研究会は、大学や近江楽座のキャラクターを使い外来生物が生態系や人間活動に与える影響を内容とする環境教育動画を作成し YouTube に投稿した。

(5) コロナ禍の中、癒しのキャンドルナイトイベント

令和2年12月4日、あかりんちゅは岐阜県大垣市のOKB street 7周年記念イベントで1,000個の手作りリサイクルキャンドルを使ったキャンドルナイトを行った。コロナ禍の時事的な状況や土地に関わるものなど工夫を凝らしたデザインで、地域の方からは「日常なかなか触れる機会のない火そのものの力に魅了され、不思議と寒さもそれまでの気忙しさも忘れてしまいました。」との声を頂いた。



OKB street 7th Candle Night

(6) 新たな取組へのチャレンジ

とよさだプロジェクトは、耕作放棄地を活用し地域の方のご指導のもと野菜栽培を行っているが、令和2年度は新メンバー加入で例年より耕作する畑を拡大するとともに、新たに果樹、みかん栽培の挑戦を始めた。

Taga-Town-Project はコロナ禍でイベント企画が困難となったため、今期間を情報発信のアウトプットからインプットの時と位置付け、多賀の「字めぐりプロ

ジェクト」として、河内の風穴や桃原ごぼうなど多賀の魅力を探す時間にあてた。

地域博物館プロジェクトでは米原市の旧東草野小中学校の教室に山村景観の模型、展示室の設計図制作など常設展示のプロジェクトを任せられ、展示室完成に向けて取り組んでいる。

政所茶レン茶“一”では、イベント出店が減少し、生産した政所茶販売のためネットショップを開設し広報に力を入れ、また「しがのふるさと支え合いプロジェクト」協定締結の関係でお茶の専門家から日本茶に関する知識修得に努めた。

かみおかべ古民家活用計画では、地域のお祭りで使われ廃棄予定だった竹を利用して、関係団体の専門家の指導を受けて古民家に竹柵を製作、設置した。

古民家を活用しパー「タルタルーガ」を運営するとよさと快蔵プロジェクトでは、コロナ禍で店舗休業にあわせて、キッチンのカウンター前の吊り棚や入口のすのこなど内装のリニューアル作業や、新メニューも考案した。

1回生が27人も加入したおとくらプロジェクトは、古民家で地域の人との交流の場として喫茶営業やギャラリー展示をしているが、コロナ禍で喫茶営業ができないため、メニュー考案会や1回生おとくら体験会など実施し今後の活動の発展に向けた取組を行った。

(7) キャンパス SDGs びわ湖大会 2020 (活動報告)

令和2年11月21日に本学でオンライン形式で開催されたキャンパス SDGs びわ湖大会 2020 において、近江楽座の9プロジェクトが、それぞれの活動内容をオンラインパネル展示により発表した。

2-3 SDGs 地域化拠点の取組



滋賀県立大学
THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

×

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

滋賀県立大学SDGs宣言



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

S 滋賀県立大学は「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに

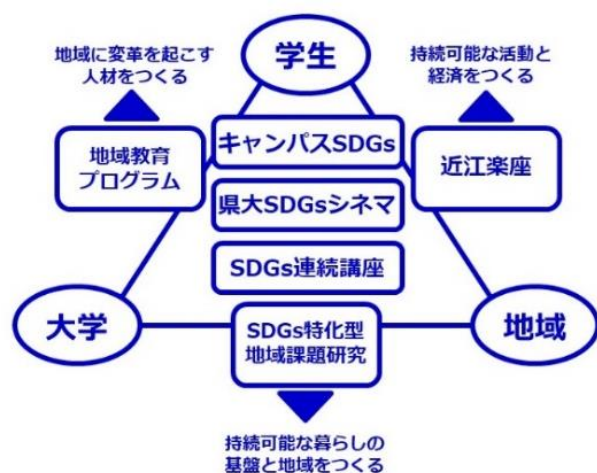
D 誰一人取り残さない持続可能な社会を目指し

G グローカルな思考と実践をもって

s 世界と地域の発展に貢献します

2-3-1 SDGs に関する取組の全体像

地域貢献大学のリーディングモデルを目指している本学は、平成30年6月に「滋賀県立大学SDGs宣言」を行った。地域共生センターは、これまでの大学の取組や資源を生かし、SDGsが目指す持続可能な社会の実現に向け、共に学び、育ち、未来を切り拓く拠点となるための全学的取組の中心となる活動を行っている。



2-3-2 キャンパスSDGsびわ湖大会2020

- 1 開催日時 令和2年11月21日(土)
10時から17時
- 2 開催形式 YouTube Liveによるオンライン開催
- 3 大会テーマ
『「子ども・若者」と「大人」がともに歩むSDGsの10年』
- 4 視聴回数 延べ875回
- 5 事例報告等の参加校
小学校2校、中学校1校、高等学校1校、大学7校の教育機関および地域の活動団体等
- 6 プログラムの内容
(1)第Ⅰ部 対談 コロナ禍からの学びをミライに生かす「あつまれ!がくせいの森」
ウィズコロナ時代に対応した新しい生活や活動について、大学生と滋賀県の三日月大造知事が意見交換を行った。

○登壇者

名前	所属	活動内容等
幸永幹真さん	滋賀県立大学 大学院	コロナのために困窮する 学生の支援事業に関わる
正木美帆さん	滋賀県立大学	コロナ禍での学生のつな がりづくりのためオンラ インイベント主催
野口将太郎さん	滋賀県立大学	地元青年リーダーとして コロナ下で伝統行事やコ ミュニティ存続に取り組む
沖本 怜さん	滋賀大学	彦根市内で国際交流シェ アハウスを立ち上げ運営
佐藤彩香さん	立命館大学	Sustainable week 副実 行委員長として身近な課 題から SDGs に取り組む
李 衛琳さん	聖泉大学	留学生。ジェンダー平等 の実現に向け学びや活動 に取り組む
渡辺達也さん	京都産業大学	コロナ下で地元滋賀の暮 らしを見つめる動画を制 作・配信
三日月大造さん	滋賀県知事	
上田洋平	滋賀県立大学 講師	モデレーター

(2)第Ⅱ部 基調講演

一般社団法人シンク・ジ・アース理事 上田壮一氏

モデレーター：滋賀県立大学特任准教授 森川稔

上田氏からは、持続可能な社会創生のために創造的な教育を実践する現場の先生と生徒を応援する「SDGs for School」の取組等を紹介しつつ、SDGs 達成に向けた今後の 10 年間の取組について講演頂いた。



基調講演：上田壮一氏

(3)活動報告「子ども・若者」マイプロジェクト報告

県内外の小学生から大学生が活動報告を行い、コメントーターを交えて周囲がどのように支援していくかについて考えた。

○事例発表の内容

団体名		活動内容
ルシオール・キッズ・クラブ		ホテルが住める環境づくり
草津市立渋川小学校		「世界農業遺産学習」地元の農産物を活用した石けんづくり
多賀町立大滝小学校		地域の魅力を再発見「地域診断法×ふるさとの歌づくり」
「いなまち たしゅう室」チーム		空き店舗を自分たちの居場所に「いなまち たしゅう室」
滋賀県立大学		商店街の魅力を体感するイベント「大津なかもまち商店街お弁当ラリー」
芝浦工業大学		びわ湖 SDGs スタディーツアープログラム
環びわ湖大学・地域コンソーシアム		SDGs の取組を大学生が発信する「SHIGA SDGs Studies」
コメンテーター	上田壮一氏	(一社) シンク・ジ・アース理事
	高野 翔氏	福井県立大学地域経済研究所准教授
	木田桃子氏	(一社) 暮らし育て組代表理事
モデレーター	鵜飼修	滋賀県立大学准教授



発表者「ルシオール・キッズ・クラブ」

(4)関連イベント オンラインパネル展示

関連イベントとして実施したオンラインパネル展示には次の 29 団体が参加し、それぞれの活動内容をまとめたパネルを出展した。

○参加団体

近江米振興協会、滋賀県農村振興課、フードバンクひこね、NPO 法人 FootRoots、琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会、G-Readers Biwakko、彦根市立中央中学校、聖泉大学人間学部富川ゼミ・米原市役所、滋賀大学山本ゼミ、聖泉大学看護学部地域看護学ゼミナール、湖南市地域創生推進課地域エネルギー室、滋賀県立大学生活協同組合、高島市、「ポストコロナにおける滋賀県の姿を考える」ワーキンググループ、大津市企画調整課、土とつながる暮らし soil、びわ湖東北部地域連携協議会、滋賀県地球温暖化防止活動推進センター、マザーレイクフォーラム運営委員会・滋賀県琵琶湖保全再生課、にじいろとんぼアクティビティー、滋賀県立大学近江楽座「BAMBOO HOUSE PROJECT」、同「Taga-Town-Project」、同「フラワーエネルギーなの・わり」、同「子ども学習支援サポーターズ」、同「おとくらプロジェクト」、同「未来看護塾」、同「廃棄物バスターズ」、同「滋賀県大生き物研究会」、同「田の浦ファンクラブ学生サポートチーム」

2-3-3 教育、研究、地域への波及

1 地域教育プログラムでの SDGs

前記 2-2 に記載の地域教育プログラムにおいて持続可能な社会づくりを担う人材の育成に取り組んでいる。

特に SDGs に関しては、「地域デザイン D」におけるラジオ放送番組「ちかく de とくで SDGs」の企画・制作・実施で SDGs をテーマに取り上げ（前期 2-2-5 近江楽土（地域学）副専攻の項を参照）、「SDGs と滋賀のグローバルイノベーション～近江の暮らしとなりわい～」では、SDGs に親和性が高い滋賀の地の取組を事例にして持続可能な共生社会の実現への必要な知見、課題や実践のあり方について学んだ。

なお、学生主体の地域課題解決に貢献する活動「近江楽座」については、前記「2-2-7 近江楽座」の項を参照されたい。

○令和 2 年度「近江の暮らしとなりわい～SDGs と滋賀のグローバルイノベーション」のゲスト講師

青山裕史さん（油藤商事(株)専務取締役）
川村美津子さん（NPO 法人つどい理事長）
戸田直弘さん（守山漁業協同組合：漁師）
堀彰男さん（せせらぎの郷須原代表：魚のゆりかご水田農家）
井上慎也さん（KUMINO 工房代表：社会事業家）
滋賀県立大学近江楽座（おとくらプロジェクト、あかりんちゅ、Taga-Town-Project、座・沖島、政所茶レン茶 “一”）の皆さん
芝浦工業大学 SDGs 学生委員会-綾いと-の皆さん
芝浦工業大学教授 中口毅博さん
滋賀県企画調整課、農政課、森林政策課、琵琶湖保全再生課の皆さん
風かおるさん（(有)ガイア・コミュニティ）
金正和さん（大阪経済法科大学）

2 SDGs 連続講座

（SDGs の視点を持って活躍する人材育成）

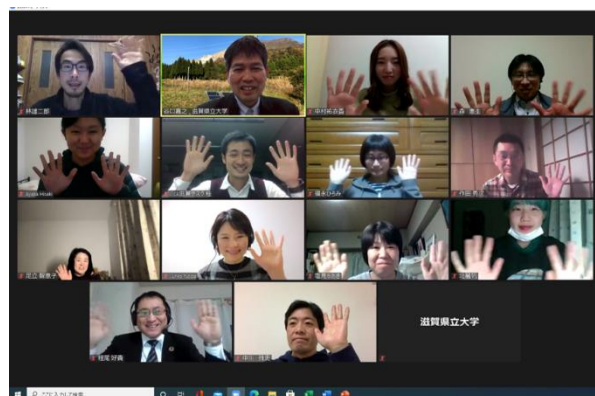
今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、オンライン(ZOOM を使用)で SDGs に関連する社会課題をテーマにした映画の上映会 を開催した。

上映後は、映画のテーマに関連する活動を実践さ

ている方をゲスト講師として迎え、15 分程度の講演をしていただいた。さらに連続講座参加者を少人数 にグループ分けし、お互いに映画や講演についての感想や気づきを共有し、今後取り組んでいきたいことなどの情報交換の時間を取った。

○ 上演作品、講師、関連する SDGs 一覧

1	映画名	「都市を耕す エディブルシティ」
	講師	江口 亜維子さん（千葉大学大学院博士研究員）
	SDGs	2, 12, 13, 15, 17
2	映画名	「スマホの真実」
	講師	辻 博子さん（一般社団法人滋賀グリーン活動ネットワーク事務局長）
	SDGs	12, 15, 16
3	映画名	「難民キャンプで暮らしてみたら」
	講師	関根 健次さん（ユナイテッドピープル株式会社 代表）
	SDGs	1, 10, 16, 17
4	映画名	「バベルの学校」
	講師	沖本 怜さん（国際交流シェアハウス 代表）
	SDGs	4, 17
5	映画名	「ポパティ・インク」
	講師	森 恵生さん（フードバンクひこね 代表）
	SDGs	1, 2, 3, 8, 9, 10, 12, 17



SDGs 連続講座オンラインの様子

3 SDGs 出前講座&落語

(1) 県内外の行政や教育機関、企業等からの要望を受けて、講演等を実施した。

○ SDGs 出前講座等の出講先

	時期	出講先	講座内容
1	R2.7.2	長浜北星高等学校	出前講座
2	R2.10.14	滋賀県企画調整課	出前講座
3	R2.11.11	滋賀県産業支援プラザ	出前講座
4	R2.11.12-13	彦根市立中央中学校	学習支援
5	R2.12.1	近畿環境パートナーシップオフィス	出前講座
6	R3.1.20	大津市立唐崎小学校	出前講座
7	R3.2.7	滋賀県男女共同参画センター	オンライン講座
8	R3.2.16	滋賀県信用保証協会	出前講座
9	R3.2.24	彦根市立東中学校	講話

(2) FD・SD 研修会

教職員が SDGs の取組の必要性を一層認識するとともに、SDGs の達成を意識して自らの研究や学生に対する教育活動を行うことを目的に、びわ湖東北部地域連携協議会の事業として、オンラインによる FD・SD 研修を企画し、開催した。

日時：令和 2 年 12 月 10 日（木）13 時～15 時

対象者：びわ湖東北部地域連携協議会参加団体（滋賀県立大学、滋賀大学、滋賀文教短期大学、長浜バイオ大学、聖泉大学、長浜市、彦根市、米原市、滋賀県、長浜商工会議所、彦根商工会議所）の教員・職員

申込者数：118 名（zoom による参加 60 名、YouTube による参加 82 名、配信会場での参加 12 名）

内容：第 1 部 天満家真念さん（滋賀県立大学地域共生センター森川稔特任准教授）の SDGs 落語「八坂長屋の SDGs」

SDGs を楽しく分かりやすく理解するための創作落語

第 2 部 SDG パートナース田瀬和夫さん、柴田美紀子さんによる講演「SDGs で変わるビジネスと教育」

大学や地方公共団体の教職員は、SDGs とどう向け合えばいいのか、自らの業務と社会課題との関りについていかに理解して自ら考えるのかのヒントを、企業の取組事例などを交えて提示した。

4 SDGs に関連付けた大学の知的資源・地域活動の発信

本学のすべての教員の研究内容、産学や地域連携活動を分かりやすく紹介する地域連携ガイドブックについて、令和 3 年 3 月に教員ごとに SDGs 目標と関連付けた形で取りまとめた 2021 年版を発刊した。



*滋賀県立大学ホームページ「地域交流・生涯学習」
「滋賀県立大学地域連携ガイドブック」参照

また、本学産学連携センターが本学の研究シーズと地域社会のニーズが繋がるよう毎年発刊している「滋賀県立大学研究シーズ集」についても、令和 2 年 10 月に SDGs の視点に立った分かりやすい内容に改めて発刊された。



*滋賀県立大学ホームページ「研究・産学連携」
「研究シーズ集」参照

5 滋賀県×滋賀県立大学×内閣府

地方創生 SDGs フォーラム

普段の生活からひも解く SDGs の視点を分かりやすく紹介し地方創生や SDGs をより身近に考えるきっかけ作りを目的に、令和 2 年 11 月 20 日（金）に「滋賀県×滋賀県立大学×内閣府 地方創生 SDGs フォーラム」を開催した。

フォーラムでは滋賀県の廣脇正機総合政策部長、内閣府地方創生推進事務局の北廣雅之参事官とともに、本学地域共生センター鶴飼准教授が出席し「SDGs 地域化拠点としての滋賀県立大学の取組」を講演し、パネルディスカッションにおいては、①地域課題の解決にあたって地域資源をどう捉えて解決するか、②コロナ禍において地方創生 SDGs をどう活用・推進するか、③地方創生 SDGs を上手く進めるためのポイントや課題、④地方創生 SDGs を進めるにあたって一人ひとりができることは何か、などについて議論した。

*イベントサイトにて講演資料、議事録公開

<https://www.gov-online.go.jp/tokusyu/COVID-19/policy/chihou-sdgs.html>



出典：政府広報オンライン

2-4 コロナ禍の学生への食糧支援の取組

2-4-1 概要

コロナ禍で生活に困っている学生や留学生を支援しようと地域共生センターが声をかけたところ、多くの教職員をはじめ、この取組を聞かれた卒業生など諸先輩、地域の皆さん、フードバンクびわ湖さん、地元彦根市からも大きな支援を頂いた。

また、年度後半には地域の農業法人さんのご協力で規格外で出荷できない農産物などを頂き、多くの学生に配布した。このことはSDGsの推進に取り組んでいる本学としても、SDGsのターゲットの一つである食品ロス削減につながるものであり、令和3年度も引き続き取り組んでいる。

2-4-2 教職員等の寄付による支援

令和2年度前期は新型コロナウイルス感染症の拡大で全国的に緊急事態宣言の発令がなされ、外出自粛などの影響でアルバイト収入に依存する多くの学生が生活面で厳しい状況となった。

このため、令和2年5月に地域共生センターが主体となって学生支援のため、教職員に対してお米や食糧品の支援を呼び掛けたところ、多くの教職員をはじめ、この取組を聞かれた卒業生など諸先輩、地域の皆さん、フードバンクびわ湖さん、地元彦根市などから多くの支援を頂いた。6月から8月にかけて計5回実施した食糧支援の結果、支援を受けた学生は延べ983名、配布した食糧は精米1,960kg、缶詰1,220個、レトルトカレー955個、パスタソース676個、味噌600個、乾麺444個、インスタントラーメン362個、レトルト丼302個、カレールー300個のほか備蓄用のわかめご飯等700個、玉ねぎ160kg、地元産のじゃがいも120kgなど多くの支援ができた。

配布にあたっては、廣川学長をはじめ教職員から、学生に対して勉強や生活の様子を聞くなど声をかけ、学生からは「ありがとうございます。」「助かります。」と感

謝の気持ちで受けて取ってくれた。

一方で、学生からは「自分の部屋にずっといる。」「友達ができない。」「友達と会えない。」「講義の課題レポートが多くて大変。」「モチベーションが上がらない。」「アルバイト収入が減って厳しい。」などといった不安の声が多く聞かれた。これらの状況を学内で共有するとともに、学生には悩みは一人で抱え込まず大学の相談窓口（一覧表を配布）への相談を勧め、サークルや近江楽座のホームページなどを案内した。



廣川学長からの配布



地域共生センター鴨飼准教授の配布



第1回支援食糧品



配布した 2kg 米袋



一回り大きなブロッコリーの配布

2-4-3 県大フードロス削減アクション ー規格外野菜配布による支援の取組ー



令和 2 年度前期の食糧支援のアンケートで学生から「支援はありがたいが、見た目が悪くて販売ず廃棄されるような農産物などがあれば配布頂きたい。」などの声を受け、地域の農業法人に協力をお願いしたところ、玉ねぎ、キャベツ、ブロッコリーの規格外のものを無償で多数いただき、希望する学生に配布した。

配布は令和 2 年 11 月から 12 月にかけて計 4 回取り組み、受け取った学生は延べ 584 人、配布した野菜の総重量は約 430kg となった。なお、令和 3 年 1 月中旬から大学は再び遠隔授業となったため取組はいったん中断し、同年 4 月からの新学期に再開した。

この取組は、今なお生活に困っている学生の支援になることはもちろん、市場出荷規格外のためその多くが捨てられることとなる農産物を学生に配布することで、SDGs のターゲットの一つ食品ロス削減につなげるとともに、学生の食品ロス削減への意識向上や地域やそこで営まれている農業への愛着を醸成することに繋がるものと言える。



大きなキャベツをカットして配布

2-5 地域連携

2-5-1 地域連携相談窓口の相談対応

地域と本学をつなぎ SDGs の達成に向けた取組をはじめとする本学のシーズを生かした地域貢献を推進するため、地域共生センターに地域連携相談窓口を設置し、地域連携コーディネーターを配置した。

これまでの相談対応件数は次のとおり。

○地域連携相談窓口の相談受付件数

年度	相談対応件数
平成 30 年度	35 件
令和元年度	64 件
令和 2 年度	78 件

○令和 2 年度の相談者分野別件数

行政	33 件	地域団体	10 件
学校等	9 件	研究機関	1 件
企業	16 件	学内	4 件
経済団体	4 件	学生団体	1 件

○地域連携窓口の連絡先

滋賀県立大学地域共生センター

TEL : 0749-28-9851

FAX : 0749-28-0220

e-mail : chiiki_koken@office.usp.ac.jp

○連携の事例

(1) 彦根麦酒 直売所&醸造所の建築設計

本学近郊の彦根市石寺町で未利用となっていた土地を活用し、地域共生センター鶴飼准教授の考案したビジネスモデルをもとに、地元石寺町をはじめ本学OBが協力し、地元の企業が出資した地域連携の体制でスタートした地ビールの製造。地元石寺産の小麦も活用し、市内で採集した酵母活用も研究している。醸造所は彦根麦酒の依頼を

け、本学環境科学部環境建築デザイン学科の白井宏昌教授が担当した。なお、この建物は日本空間デザイン賞 2021 のサステナブル空間賞を受賞。



彦根麦酒直売所&醸造所



彦根麦酒商品

(2) 彦根の未来を創るアイデアの可視化

彦根市の依頼で「彦根の未来を創るアイデアコンテスト」受賞作品を可視化する取組に本学生活デザイン学科の徐研究室の学生が取り組んだ。提案者のアイデアに対する思いや実現した時のイメージなどをヒアリングし、アイデアを分かりやすくビジュアル化しショッピングセンターで広く公開された。



2-5-2 県内自治体等との連携

本学は県内市町と連携協力して地域課題解決に資する取組を行い地域社会に貢献するため、平成22年度より連携協力に関する協定の締結を進めている。令和2年度は連携自治体とオンラインを活用した地域課題に関する意見交換を行い、新たな取組が生まれるなど連携関係を継続的かつ実のあるものになるよう努めた。

(1) 高島市との包括連携協定

令和2年10月2日には高島市と協定を締結し、①人材の育成に関する事業、②文化振興に関する事業、③産業・農業の振興に関する事業、④健康づくりに関する事業、⑤地域の活性化に関する事業、⑥学生の地元就職の推進に関する事業、⑦SDGsの普及・実践に関する事業に連携して取り組むこととした。本協定を受け高島市で取り組まれる「たかしま市民大学」の設立に地域共生センター上田洋平講師が協力することとなった。



高島市との連携協定調印式

(2) 滋賀県中小企業家同友会との包括連携協定

令和3年3月24日、滋賀県中小企業家同友会と包括連携協定を結んだ。

これまでからCOC+事業における地元就職推進の取組で協力関係にあったが、今後、本学が実施する起業的人材養成プログラムの充実に際し、同会から外部講師として出講頂き、社会で必要とされるスキルや実践力を身につけ、会員企業において学生の実践学習の受入や課題解決型インターンシップの充実も進める。

また、本学の知的資源を活用した企業人材の育成支援や技術相談、共同研究、新事業の創出支援などにも連携して取り組む。



滋賀県中小企業家同友会との連携協定調印式

○これまでに県内自治体と締結した連携協定の状況

番号	年月日	協定締結相手方
1	H23.3.24	彦根市
2	H23.4.15	近江八幡市、近江八幡商工会議所、安土町商工会
3	H23.6.23	長浜市
4	H24.9.7	東近江市
5	H24.12.27	米原市
6	H25.7.3	守山市
7	H26.6.26	愛荘町、豊郷町、甲良町、多賀町
8	H28.3.30	草津市
9	H31.1.16	大津市
10	R1.9.5	竜王町
11	R2.10.2	高島市

2-6 生涯学習

「春期公開講座」、「公開講義」はともに、開学翌年の平成8年から実施している事業である。一方、「社会人専門講座」は平成26年度から実施してきた。

しかしながら、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、これまで実施してきた学内での対面での取組は全て中止した。一方で、オンラインを活用した公開講座を他大学とも連携しながら実施した。

2-6-1 公開講座

公開講座は、地域住民の知的欲求に応え、知識や教養を身につける学習機会の提供ならびに本学の有する知的財産を地域住民に還元し、開かれた大学として本学の地域社会に対する役割を果たすことを目的としている。

(1) 春期公開講座

令和2年5月～6月の土曜日に、各学部から推薦された講師による4回シリーズの公開講座を予定していたが中止した。

(2) 社会人オンライン公開講座

本学人間文化学部地域文化学科中井均教授による「安土城の謎を解く」をテーマにした3部構成のオンライン講座を実施し令和2年度末までYouTube配信した。なお、これはびわ湖東北部地域連携協議会の事業として実施した。(合計視聴回数1,465回)



	各回テーマ	視聴回数
1	安土城の北限を探る	697回
2	柴田勝家献上の石	408回
3	城内に建立された惣見寺	360回

(3) サテライト・プラザ彦根 特別講演会

本学、滋賀大学、聖泉大学、平和堂、彦根商工会議所、彦根市で構成するサテライト・プラザ彦根の事業として、令和3年3月15日に長浜市市民協働部学芸専門監太田浩司氏を招き「明智光秀の生涯と近江～大河ドラマ『麒麟がくる』では麒麟が来たか?」と題して滋賀県とゆかりのある明智光秀をテーマに特別講座会を本学が企画・実施した。なお、この講演会は感染防止のため会場参加者を定員の半分以下の27名とし、希望者にはYouTube配信した。(視聴回数149回)

(4) びわ湖東北部地域連携協議会市民教養講座
同協議会を構成する5大学・短期大学が共同で、地域の皆さんの学びのきっかけづくりや知的好奇心を満たすことを目的にオンライン配信による市民教養講座を実施し、本学からは次のとおり参画した。

	講師	テーマ
1	環境科学部丸尾雅啓教授	水質はどうあるべきか。
2	人間文化学部中井均教授	小谷城と虎御前山砦

2-6-2 公開講義

公開講義は、本学の講義を地域住民に公開することにより、地域の人々へ学習の機会を提供することを目的としている。

令和2年度は前期公開講義を実施すべく参加者を募集し準備していたが新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止し、後期もコロナ対策で安全の確保が見込めないため中止した。

2-7 他大学等との連携

2-7-1 環びわ湖大学・地域コンソーシアム

県内 14 大学と県、市町、関係団体で構成される環びわ湖大学・地域コンソーシアムにおける以下の大学地域連携事業に他大学等と連携して取り組んだ。

○令和 2 年度の本学に関わる主な事業

① 大学地域連携課題解決支援事業

令和 2 年度の実施事業 15 件に助成（本学は「お弁当ラリーを通じた大津ナカマチ SDGs 商店街プロジェクト」が採択されたが、新型コロナウイルス感染症拡大により事業は中止となった。）

② 学生支援事業

「SDGs にかかる取組の推進」をメインテーマとし県内大学の学生により組織される学生委員会と連携し、持続可能な社会を実現する活動の情報を発信するブックレットの制作に取り組んだ。

本学からも 1 名の学生が参加した。

③ 単位互換事業

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症に伴う対応として学生の安全や健康の確保を図る観点から、単位互換履修生の受け入れは全て中止された。

④ 政策研究事業

県内大学等におけるリカレント教育振興のための政策研究事業が実施され、「未来の滋賀を担う経営者・企業人のためのリカレント教育プログラム開発報告書」が取りまとめられた。

同報告書では、社会課題に対応するプロジェクトベースドラッシングの必要性も提言され、先行事例として本学地域共生センターが開講している「近江環人地域再生学座」が紹介された。

2-7-2 大学サテライト・プラザ彦根

彦根市内の 3 大学、株式会社平和堂、彦根商工会議所、彦根市が協働で運営するものであるが、新型コロナウイルス感染症拡大のため事業を縮小して実施した。

① 「彦根・湖東学」

彦根・湖東地域の自然環境、地域社会、歴史について理解を深めることを目的に 3 大学と彦根市がテーマに沿って 1 日ずつ講義を担当するものであるが、令和 2 年度は中止した。

② 特別講演会

前記 2-6-1 公開講座の項に記載のとおり、令和 3 年 3 月 15 日に長浜市市民協働部学芸専門監太田浩司氏を招き「明智光秀の生涯と近江 ～大河ドラマ『麒麟がくる』では麒麟が来たか?」をテーマに実施した。

2-7-3 びわ湖東北部地域連携協議会

びわ湖東北部地域の 5 大学、県、3 市、2 商工会議所、環びわ湖大学・地域コンソーシアムの連携によって、SDGs を活用した豊かに働き生活できるびわ湖東北部地域の創出に向けて、次の事業に取り組んだ。

○令和 2 年度の本学の関わった主な事業

- ・地域コミュニティの活性化のため、前記 2-6-1 公開講座の項に記載のとおり、生涯学習事業として「市民教養講座」、「社会人オンライン公開講座」を共催実施した。
- ・SDGs 関連として、「キャンパス SDGs びわ湖大会 2020」、「SDGs 連続講座」、「FD・SD 研修会」を共催実施した。
- ・琵琶湖東北部地域における地域活性化に向けた事業「SDGs でつながる学生の地域連携プロジェクト」に、近江楽座から未来看護塾、フラワーエネルギー「なの・わり」、子ども学習支援サポーターズが参加した。

3 スタッフ紹介

3-1 地域共生センターの体制等【2020年度】

センター長（地域連携担当理事）	高橋 滝治郎
准教授	鵜飼 修（地域教育プログラム総括、地域共生論、近江楽士（地域学）副専攻、近江環人地域再生学座、近江楽座等）
講師	上田 洋平（地域教育プログラム、地域共生論、近江楽士（地域学）副専攻、近江環人地域再生学座、近江楽座等）
特任准教授	森川 稔（SDGs、近江楽士（地域学）副専攻等）
特任准教授	西岡 孝幸（近江（地域学）副専攻、地元就職・起業支援等）
地域連携・研究支援課課長	土淵 孝（事務総括）
主幹	有田 高志（地域連携総括、他大学との連携等）
副主幹（主任調査研究員）	秦 憲志（調査研究、近江楽座、地域教育プログラムの支援等）
主査	高谷 美穂（生涯学習、近江楽座等）
特任職員	谷口 嘉之（SDGs、地域連携等）
職員	小川 利佳（地域課題科目、近江楽士（地域学）副専攻等）
職員	炭田 優子（近江環人地域再生学座事務等）
職員	山村 薫（SDGs、地域教育プログラム事務等）
特任職員	清川 佳子（生涯学習事務）
職員	前川 瑛美梨（近江楽座事務）

○地域共生センター兼務教員			
環境科学部	教授	浦部 美佐子	
同	教授	大久保 卓也	
工学部	教授	乾 義尚	
同	教授	バラチャンドラン ジャヤデワン	
人間文化学部	教授	印南 比呂志	
同	教授	高梨 克也	
人間看護学部	准教授	米田 照美	

○地域共生論運営委員			
環境科学部			
環境生態学科	教授	西田 隆義	
環境政策・計画学科	講師	平岡 俊一	
環境建築デザイン学科	准教授	ヒメハシ バルデホ、和ノ 元	
生物資源管理学科	准教授	岩間 憲治	
工学部			
材料科学科	准教授	宮村 弘	
機械システム工学科	教授	安田 寿彦	
電子システム工学科	准教授	坂本 真一	
人間文化学部			
地域文化学科	教授	市川 秀之	
生活デザイン学科	准教授	山田 歩	
生活栄養学科	講師	桑原 頌治	
人間関係学科	教授	松嶋 秀明	
国際コミュニケーション学科	教授	棚瀬 慈郎	
人間看護学部			
人間看護学科	教授	伊丹 君和	
	准教授	米田 照美	
	講師	千田 美紀子	
地域共生センター			
	准教授	鵜飼 修	
	講師	上田 洋平	
	主任調査研究員	秦 憲志	

○近江楽座専門委員会（※委員長）			
環境科学部			
環境生態学科	教授	浦部 美佐子	
環境政策・計画学科	准教授	林 宰司	
同	講師	平岡 俊一	
環境建築デザイン学科	准教授	金子 尚志	
同	講師	迫田 正美	
工学部			
機械システム工学科	准教授	河崎 澄	
電子システム工学科	教授	柳澤 淳一	
人間文化学部			
地域文化学科	教授	石川 慎治	
生活デザイン学科	教授	印南 比呂志※	
同	講師	佐々木 一泰	
人間関係学科	准教授	原 未来	
人間看護学部			
人間看護学科	教授	伊丹 君和	
	教授	横井 和美	
地域共生センター			
	准教授	鵜飼 修	

○SDGs 専門委員会委員			
地域共生センター	センター長	高橋 滝治郎	
環境科学部	准教授	瀧 健太郎	
工学部	准教授	杉山 裕介	
人間文化学部	准教授	木村 裕	
人間看護学部	准教授	馬場 文	
地域共生センター	准教授	鵜飼 修	
	講師	上田 洋平	
事務局各課職員			

3-2 教職員の活動

3-2-1 受賞、著書、論文

- (1) 濱野祐華, 鶴飼修, 板谷裕美 日本の子育てシェアに関するスコーピングレビュー 滋賀県立大学人間看護学部 人間看護学研究 19 31 ~ 41 (2021 年 3 月) 共著共同(副担当)
- (2) 地域共生論運営委員会(鶴飼修, 上田洋平 他) 改訂版 地域共生論—300 人規模のアクティブラーニング— (2021 年 3 月)
- (3) 上田洋平 「ミライリポート SDGs 企業に学ぶ①・命の基本にさかのぼる「逆転・逆洗」の発想」『信用保証レポート 2020 年夏号』滋賀県信用保証協会(2020 年 7 月)
- (4) 上田洋平 「ミライリポート SDGs 企業に学ぶ②・守りの文化を守りする矜持」『信用保証レポート 2021 年冬号』滋賀県信用保証協会 (2021 年 1 月)
- (5) 谷口嘉之 大学の地域連携の現在とこれから 一大学のメディア的役割について— 大学地域連携 vol.8 地域と大学を繋ぐコーディネーターネットワーク構築事業 28~34 (2021 年 3 月)

3-2-2 学会発表

- (1) 范瑜軒, 鶴飼修 台湾の地方部における空き家の活用に関する研究— 日本の空き家のシステムの台湾における適用可能性 日本計画行政学会 日本計画行政学会 第 43 回全国大会 研究報告・ワークショップ要旨集 134 ~ 139 2020 年 11 月 共著共同(副担当)
- (2) 秦憲志 土地等級に着目した明治期・野洲川下流域条里地割集落における空間特性 日本建築学会大会・農村計画部門 オンライン発表会 2020.11.29 日本建築学会大会学術講演梗概集 農村計画 137~138

3-2-3 研究会、講演会、特別講義等での発表

- (1) 鶴飼修 2020. 8.25, 10.4, 10.27, 11.17, 12.15 「郷市区集落元気プラン策定会議」 福井県美浜町 美浜町生涯学習センター
- (2) 鶴飼修 2020.12.1 「森里川湖をサステナブルに暮らそう！」 近畿環境パートナーシップオフィス
- (3) 鶴飼修 2020.2.11 野洲市生活支援体制整備事業「地域診断法を活用した地域づくり」 滋賀県農政水産部農業経営課 野洲市総合防災センター

- (4) 上田洋平 2020.8.2 つなげよう、支えよう森里川海・酒匂川ふるさと絵本づくりキックオフイベント「ふるさと絵本について」 環境省、鎮守の森コミュニティ推進協議会 小田原市民交流センター
- (5) 上田洋平 2020.9.13 「気候危機いま私たちのなすべきこととは? ~コロナ禍を超えて~」 環人 8 プラス オンライン開催
- (6) 上田洋平 2020.9.28 「地域文化を未来へつなぐ」 明石市立高齢者大学校あかねが丘学園 明石市立高齢者大学校 アスピア明石
- (7) 上田洋平 2020.10.14 滋賀県庁 SDGs アクション「SDGs と地域社会」 滋賀県企画調整課 環びわ湖大学・地域コンソーシアム
- (8) 上田洋平 2020.11.3 酒匂川水系保全協議会設立 60 周年記念シンポジウム「酒匂川ふるさと絵本作りの制作意義について」 酒匂川水系保全協議会 小田原市役所
- (9) 上田洋平 2020.11.11 滋賀県産業支援プラザ職員研修会「SDGs と地域社会」 滋賀県産業支援プラザ コラボしが 21
- (10) 上田洋平 2020. 12.4 「地域異文化を活かしたまちづくり」 第 32 期全国地域リーダー養成塾 一般財団法人地域活性化センター 大手町サンスカイルーム
- (11) 上田洋平 2020. 12.5 長浜女性会議 長浜市パートナーシップ推進協議会 高月まちづくりセンター
- (12) 上田洋平 2021.1.7 滋賀県レイカディア大学米原校必修講座「過去を育てて未来をつくる」 滋賀県レイカディア大学米原校 滋賀県文化産業交流会館
- (13) 上田洋平 2021.1.20 「SDGs ってなんだろう」 大津市立唐崎小学校
- (14) 上田洋平 2021.2.2 世界湿地の日記念シンポジウム「ふるさと絵屏風を通して見える水と暮らし」 日本国際湿地保全連合、オンライン開催
- (15) 上田洋平 2021.2.16 滋賀県信用保証協会 SDGs 研修会 滋賀県信用保証協会
- (16) 上田洋平 2021.3.12 滋賀県レイカディア大学草津校必修講座「過去を育てて未来をつくる」 滋賀県レイカディア大学草津校 滋賀県長寿社会福祉センター
- (17) 上田洋平 2021.3.17 未来の担い手を育むキャリア形成支援事業第 2 回連絡協議会「地域と連携したキャリア教育」 滋賀県教育委員会 高校教育課 オンライン開催
- (18) 秦憲志 2021.3.5 立命館大学ボランティア・サービスマスラーニング(VSL) 研究会第 5 回「新型コロナウイルス感染症によるサービスマスラーニングプログラムへの影響と対応—1 年を振り返って—」にて、「学生が参画する地域活性化研究会」の取組み紹介
- (19) 森川稔, 谷口嘉之 2020.7.2 滋賀県立長浜北星高校「SDGs に向けた行動の 10 年」

(20)谷口嘉之 2021.2.7 滋賀県立男女共同参画センターG-NET しが ユースリーダーセミナー 「2030 年を自分たちの手でどんな社会にするか？」

3-2-4 研究資金・補助金等

(1)上田洋平(2020) 寄付講義・彦根商工会議所「世界遺産のまちづくり・人づくり」2020 年度 100 万円
(2)秦憲志(2020) 科学研究費補助金「明治期、戦後成長期、現代の三つの時代を通してみる条里地割の存在形態と価値の顕在化」2020 年度 60 万円

3-2-5 社会への貢献(各種委員会など)

(1)鵜飼修(～2020) 大森街づくりカフェ 代表理事
(2)鵜飼修(～2020) 大牟田炭鉱まちファンクラブ 副理事
(3)鵜飼修(～2020) 株式会社彦根麦酒 アドバイザー
(4)鵜飼修(～2020) 大阪経済大学 非常勤講師
(5)鵜飼修(～2020)河瀬中学校・高等学校運営協議会委員
(6)鵜飼修(～2020)下石寺町自治会町づくり委員会アドバイザー
(7)鵜飼修(2020) 令和 2 年度東近江市わくわく市民活動支援補助金審査委員会委員
(8)鵜飼修(2020) 2020 年度東近江市コミュニティビジネススタートアップ支援事業選考委員及びアドバイザー
(9)鵜飼修(～2020)東近江市コミュニティビジネス相談会 アドバイザー
(10)鵜飼修(2020) 多賀の里づくり魅力化プロジェクト会議 委員長
(11)上田洋平(2020) 国土交通省丹生ダム建設中止に伴う地域整備に関するファシリテーター
(12)上田洋平(2020) 環境省近畿地方 ESD 支援センター企画運営委員会委員
(13)上田洋平(2020) 生物多様性しが戦略改定専門家会議委員
(14)上田洋平(2020) 滋賀県文化審議会委員
(15)上田洋平(2020) 滋賀県ふるさと水と土保全対策推進懇話会委員
(16)上田洋平(2020) 滋賀県美の滋賀発信方策検討懇話会委員
(17)上田洋平(2020) 滋賀県「美の滋賀」プロジェクト推進事業にかかる専門評価員
(18)上田洋平(2020) 滋賀県立近代美術館協議会委員
(19)上田洋平(2020) 滋賀県死生懇話会ファシリテーター

(20)上田洋平(2020) 滋賀移住・交流促進協議会会長
(21)上田洋平(2020) 滋賀県教育委員会未来の担い手を育むキャリア形成支援事業連絡協議会委員
(22)上田洋平(2020) 彦根市総合計画審議会委員
(23)上田洋平(2020) 彦根市文化観光推進協議会委員
(24)上田洋平(2020) 彦根シティプロモーション戦略推進委員会顧問
(25)上田洋平(2020) 東近江市近江匠人認証制度審査委員会委員
(26)上田洋平(2020) 湖南省都市計画審議会委員
(27)上田洋平(2020) 湖南省景観アドバイザー
(28)上田洋平(2020) 米原市社会教員委員
(29)上田洋平(2020) 米原市ルッチまちづくり大学チーフコーディネーター
(30)上田洋平(2020) 高島市協働事業提案審査会審査員
(31)上田洋平(2020) 愛荘町自治基本条例推進委員会委員長
(32)上田洋平(2020) 愛荘町ゆめまちテラスえち企画運営委員会
(33)上田洋平(2020) 滋賀 SDGs×イノベーションハブ滋賀 SDGs×ビジネス表彰審査員
(34)上田洋平(2020) 彦根商工会議所地域交通研究会メンバー
(35)上田洋平(2020) 滋賀大学 非常勤講師
(36)上田洋平(2020) 特定非営利活動法人碧いびわ湖理事
(37)上田洋平(2020) 認定特定非営利活動法人つどい 100JOB 委員会委員長
(38)西岡孝幸(2020)地域雇用活性化支援アドバイザー 滋賀労働局
(39)西岡孝幸(2020)大津市産業化支援コーディネーター
(40)秦憲志(2020) アーバンデザインセンターびわこ・くさつ事業運営懇話会委員
(41)秦憲志(2020) 大津市市民活動センター第三者評価委員会委員
(42)秦憲志(2020) 滋賀県協働プラットフォーム コーディネーター
(43)秦憲志(2020) 愛荘町自治基本条例推進委員会副委員長
(44)秦憲志(2020) 愛荘町みらい創生会議会長
(45)秦憲志(2020) 滋賀県特定非営利活動法人指定委員会会長
(46)秦憲志(2020) 特定非営利活動法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会理事
(47)谷口嘉之(2020) 米原市市民活動団体コーディネーター
(48)谷口嘉之(2020) 第 2 回 SDGs QUEST みらい甲子園関西エリア大会 実行委員
(49)谷口嘉之(2020) 長浜市地域活力プランナー活動報

告会評価委員

(50)谷口嘉之(2020) 長浜市市民活動団体支援事業・地域づくり協議会提案事業 審査委員長

3-2-6 マスメディアとの対応

(1)森川稔 2020.9.13 まちを快適に 初回 19 人学ぶ
計 13 回 地元先生育成講座が開講 中日新聞

(2)森川稔 2020.10.10 SDGs を身近な課題に 中央
中 独自ゲームで知恵絞る 中日新聞

(3)森川稔 2020.12.2 県大生出演の SDGs 番組 FM 彦
根と協力、専門家招いて放送 滋賀彦根新聞 地域共生
センター 森川稔特任准教授、工学部 秋山毅准教授、
工学研究科小山奈津季さん(2 年)、人間文化学部久木絢
加さん(2 年)

(4)上田洋平 2021.3.9 「死生懇話会」140 人聴講 県
主催 専門家ら意見交換 毎日新聞 地域共生センター
上田洋平講師、人間看護学部 青柳光哉さん(3 年)

(5)谷口嘉之 2021.1.16 講演講座 ユースリーダーセ
ミナー第 2 回講座「SDGs を知る！」 産経新聞

(6)谷口嘉之 2021.1.19 映画で触れる SDGs あすか
らオンライン連続講座 県や彦根、長浜、米原 3 市と県
立大など 中日新聞

3-3 2021 年度教職員メッセージ

○鶴飼修

2020 年度のスタートはコロナとの戦いから始まった。全 1 回生必修の科目「地域共生論」は、オンデマンドでの開講となり、その対応準備、調整に忙殺された。1 クラス 300 人超の授業のオンデマンド授業は珍しくはないが、地域共生論の狙いである「学生同士のコミュニケーション」を如何にとることができるようにするか、という点で苦慮した。教員も、学生も、大学自体も慣れない状況の中での実施となり、結果として前期中には、意図したコミュニケーションのシステムを確立することはできず、受講生にも負担をかける場面もあり、反省しきりであった。

その反面、良い気づきも得ることができた。グループワークは得手不得手があり、中にはフリーライダー的な受講生も現れるが、レポート提出が各自の責任になるので、しっかりとした内容のレポートが多く、レポートを見る限りは 1 人ひとりの学びを確認することができた。新年度は、ぜひ、リアルなコミュニケーションと、レポート提出システムを組み合わせ、授業の充実と、システムを活用した教職員の負担軽減を図っていきたい。

ウィズコロナ、アフターコロナのライフスタイルを如何にして構築するか、が問われている。しかしながら、人間はそう簡単に進化するものではない。コロナ禍は、人々が、ライフスタイルの芯、すなわち、ヒト・人としてのあるべき姿を考え、実践してこなかったことに、気づきを与えてくれたのではないだろうか。今まさに、地球に生きる私たち人類のあるべき姿が問われているのだと思う。

○上田洋平

「わたしのまちが이었다／わたしの／まちが이었다／こうして／草にすわれ／それがわかる（「草にすわる」八木重吉『定本八木重吉詩集（新装版）』弥生書房、1997 年）」。

コロナによる自粛、いわゆる「ステイホーム」の期間中、この短い詩が繰り返し思い返された。「人間よ、まあ一度、草にすわれ。これまでの生き方をみつめなおせ」と、地球が、自然がメッセージをよこしたのではないか。そんな風にも感じた。

それにしても、アクティブラーニングやフィールドワーク、地域の方との触れ合いを身上とする地域共育プログラムにとっては、それらが軒並み出来ないことに大いに苦労しもしどかしい思いをした一年であった。学生のみならず地域に出られず残念な思いをしたことと思う。それを地域の方々も共に残念がって下さっているということが、長年の信頼の証左でもあったが。

年度前半にはまさに YouTuber なみの頻度と数で授業動画を編集・投稿することに追われたが、各種教材も含めて、この間に作り上げたコンテンツは今後しばらくは資産として活用できそうだ。

既にパソコンには搭載されていたものの、その日まで開いて見ることもなかったオンライン会議用アプリを、今では自分も含め多くの人が当然のようにして活用している。この技術の普及によって逆に会議が増えたことには閉口するが、全国の実践者たちを授業の場に召喚しやすくなった。ひとつの技術がなりわいや組織・制度の変化にまで波及し、やがて価値観、世界観をも変えていく様子を自身も当事者として体感している。文化変化というものは通常じわりじわりと進むものだが、コロナ禍の 1 年で、私たちの社会は 10 年分くらいの変化を経験しているように感じる。学ぶこと働くことのカタチや価値観は、コロナ禍を機に、大きく変わっていくだろう。

今年も数多くの自治体や地域の方々からあらゆるテーマでご用命を頂いた。「まちづくりの総合医・ホームドクター」を自称する身として喜んでここで受け止め引き受ける一方、当センターから各学部・研究科（すなわち専門医）や学生たちへ、あるいは地域同士の連携へといかにさばき、つないでいくか。そのためのよりよいシステムの充実を図りたい。

お祭り騒ぎや大もうけを望んでいるのではなく、昨日と変わらぬ今日を、今日と変わらぬ明日を「ここで・ともに・無事に」生きていくこと。地域・コミュニティの願いも目的も、そぎ落とせば結局それに尽きると思っている。地域・コミュニティの無事の暮らしに寄与すること。それが当センターの使命であることをあらためて痛感した一年であった。

○西岡孝幸

「SE コースは、社会の課題解決に取りくむ学生を地域の企業とともに育みます」。

SE 担当の西岡です。

「近江楽土」副専攻の SE コースは平成 27 年度に文科省より採択された COC+事業における教育改革の一環として新設されました。COC+事業の目的は「若者の地元定着」でした。

コースの内容も、その目的に沿うように、学生が普段なかなか接触する機会が少ない地元の起業家や企業経営者などに登壇いただき、積極的に学生と交流を図っていただきました。

令和 2 年 3 月で COC+事業は終了し、令和 3 年 4 月からは COC+事業の目的を引き継ぎつつ、新たに学生

の起業家精神の醸成を目的としたコースにリニューアルしました。リニューアル後は「ソーシャル・ビジネス概論」「MBA 入門」「ビジネス・プランニング」「地域デザインD」の4講座となっています。講座の内容も地元の企業団体の力強い協力を得て理論と実務を往復しながらも、より実務に近い内容になっています。受講生はコースを履修することで「ソーシャル・アントレプレナー」の称号を授与されるにふさわしい社会課題をビジネスモデルで解決できる人材に近づくことが出来るのです。

なお、令和3年7月から新たに学生の自主活動として「起業部」が立ち上がりました。今後は講座履修と起業部活動を連携させることで、起業家教育としての効果が高まるものと期待しています。

○山中智栄子

大学開学から26年目にして初めて県立大学で仕事することになりましたが、私と県立大学との関りは実は開学の前年にまで遡ります。開学前年に県庁の県立大学開設準備室で広報を担当しており、当時は受験生に向けて知名度を上げるのが大命題で、当時の準備室顧問で学長予定者だった日高敏隆先生と広報番組や受験雑誌の取材を受けまくっていました。

その頃の日高先生の口癖は、「県立大学は、琵琶湖っていうものすごく広いフィールドの中で、学生がやりたいことを見つけて自ら育つことができる、これまでどこにもなかった大学になるんです。そういう面白い大学だと伝えるために僕は歩く広告塔として何でもやるんです。」というもので、その言葉どおり、高校への訪問説明をはじめ報道機関からの取材はすべて受けてくださり、準備室が作成する広報番組もアカデミックなものからお笑い芸人とのコミカルな掛け合いのまで、何でも引き受けていただいたものでした。

今、交流センターを訪れてくれる近江楽座の活動団体の皆さんが、様々な制限がかかる中で自分たちの活動を続けていくための工夫をし、自分の考えに責任を持って行動しているのを見て、当時の先生方の思いがちゃんと伝わっているのだと嬉しく感じています。そんな皆さんが、思い通りの活動ができ、笑顔があふれる会話が飛び交う日常が少しでも早く戻る日を心待ちにしています。

最後に昔話をもう一つ。入学試験当日、試験が終わって出口付近で困り顔の受験生に遭遇。聞けば計算を間違っていて、帰りの交通費が足りないとのこと。歩いて帰らせるわけにはいかなないのでお金を貸してあげました。後日、日高学長経由で返却された時に伺ったのですが、彼女は合格まで、一緒に渡した名刺をお金に添えて神棚に上げてくれていたそうです。今も昔も県大生は素直ないい子が多いなあ。彼女は今どうしている

のかなあ。

○古澤朋之

2021年度から地域連携・研究支援課でSDGs、地域との連携や包括協定等の業務に携わっています。

本学は世界共通の目標であるSDGsの達成に貢献できるよう、2018年6月に「滋賀県立大学SDGs宣言」を行い、キャンパスSDGsびわ湖大会をはじめとする様々な取組を進めています。また、「地域に根差し、地域に学び、地域に貢献する」ことをモットーに地域貢献活動に取り組んでいます。

大学が持つ知を地域に還元する、地域で実践することが求められている時代において、これらの取組の一助となれるよう、本学らしい「地域」との連携とは何かということを日々、模索して取り組んでいます。

○秦憲志

令和2年度は新型コロナウイルスの影響で、これまでとは違う新たな取り組みを多く行った。「地域共生論」の授業がオンデマンドで行われ、学生とはレポートを通じたつながりがメインとなり、毎週、採点・コメントを行った。一方、学生たちは数多くの授業レポートに追われ、生活のリズムをつくるのに苦労し、精神的にも大変であった。特に1回生は新しい友達もできない状況で学生生活が始まったのだが、まじめに授業に取り組んでくれた。6月から数度にわたって行った食糧支援の活動によって、自粛生活中の学生たちの生の声を聞くことができ、改めて人とひとがつながるサークル活動の大切さを確認することができた。

近江楽座については、課外活動と連動し、3か月遅れの9月にスタートさせることができ、待ちわびた各プロジェクトが感染防止対策を図り、新たな活動スタイルを模索しながら独自の活動を進めた。しかし、年明け早々に緊急事態宣言が発令され活動自粛となったため、対面での活動は3月までできなくなった。例年と比べると活動期間が短くなったが、どのプロジェクトも充実した活動を行っており、4月に行った活動成果報告会では、コロナ禍とは思えないほどの充実ぶりに近江楽座専門委員会委員長の印南先生から、「本当にコロナの中でこれだけたくさんの活動を行ったの!!」と、感嘆の声が上がった。また、12月にはボランティアサークルHarmonyが「障がい者の生涯学習支援活動」で文部科学大臣表彰を受賞することができた。三日月知事に受賞報告に伺った時には、「コロナ禍の中で一筋の光を見る思いだった」と、学生団体の受賞を喜んでいただいた。

さらに、コロナ禍によって地域と関わる大学の活動が制限され、改めて「学生が参画する地域活性化」について考えてみよう、他大学の関係者に声をかけ、リモー

トでの研究会を9月にスタートさせた。学生が地域と関わることで、様々な主体間で関係性が変化していくことについて議論を深めており、課題提起していきたい。フィールドワークによる集落空間の研究の方も、今後進展させていきたい。

○森久友紀子

地域連携・産学連携を担当しています。平成8年度前期に34科目でスタートした公開講義は、令和元年度には約90科目を公開しており、さまざまな分野の講義を受講することができます。今後も生涯学習事業を通じ、地域の方々が「ここに滋賀県立大学があつてよかったな」と感じていただけるような講義・講座を提供していきたいと思っています。

○杉本一良

令和3年度から「公開講義」と「公開講座」に関する業務を担当しております。これらの事業は、本学の基本理念の中にある「開かれた大学としての生涯学習の提供」に関わって、本学開学2年目の平成8年度から実施されているものです。

「公開講義」につきましては毎年多くの方に受講いただいておりますが、現在は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となっています。再開についての問い合わせも多数いただいております。この状況が収束して皆様が学生と一緒に学んでいただける日が少しでも早く来ることを願うばかりです。

また、「公開講座」につきましても令和2年度春期は感染拡大防止のため中止となりました。予定をしていた4つの講座は、令和3年度春期にオンラインで限定配信し多くの方に視聴していただくことができました。「再び大学で講座を直接聴ける日が来ることを心待ちにしている」、「オンライン配信によって遠隔地に住んでいても視聴することができ嬉しかった」等の様々な声が事務局に寄せられています。

今後も皆様の意見をお聞きしながら、より充実した講座の提供ができるように更に工夫を重ねていきたいと考えております。

○前川瑛美梨

近江楽座の運営推進業務や広報、チームの活動サポート等を担当しています。

近江楽座は令和2年度で17年目となり、私が学生の時に近江楽座の10周年イベントに参加していたことを思うと感慨深く感じます。学生として近江楽座に関わってきた年数より近江楽座の事務局として関わってきた年数の方が長くなりました。学生の活動に対する思いや意欲はどの年の学生にも熱いものがあり、身の引き締まる思いです。

令和2年度はプロジェクト募集の延期から始まり、新型コロナウイルスにより多くの活動が制限された年となりました。しかし、新たな活動形式の模索やオンラインの活用など、活動を止めることなく、これまで引き継いできた活動を深めてくれました。

感染が落ち着き、コロナ前のように地域と一緒に活動を行えるようになるまで、まだ時間がかかるかもしれませんが、精一杯サポートをしていけたらと思います。

○谷口嘉之

私は地域共生センターの地域連携コーディネーターとして、地域活動団体や自治体と本学との連携促進やSDGsの達成に向けた取組の支援・促進に関する業務を担当しています。私のコーディネーターの仕事も3年目に入り、毎年実施する事業にも少し慣れてきたかと思った矢先、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で対面のイベントが開催できず、手探りの状態でオンラインへの移行を迫られることとなりました。

キャンパスSDGsびわ湖大会をはじめ、SDGs連続講座、SDGsシネマ等、前年まで対面で実施していたイベントをオンラインに変更することは、大きな不安の中での取組みでした。しかし、皆さんのご協力のおかげで、対面と変わらないとまではいきませんでしたが、良い雰囲気イベントをつくることができたのではないかと考えております。この場をもって改めて感謝いたします。

今回のコロナ禍は、まさに世界規模で多くの人に大きな影響を与えました。その中で私たちは何に気づくことができたでしょうか？人間が環境に与えている負荷の大きさ（コロナ禍においては経済活動の停滞のため、自然環境が大きく回復を見せた側面もありました）、社会での差別や格差の問題の深さ、経済停滞が人間の生活に与える影響なども目の当たりにされたのではないのでしょうか？これらはSDGsがめざす環境・社会・経済が調和し、誰一人取り残さない持続可能な社会をつくるということへの具体的な課題やヒントを私たちに示しているとも言えます。

恐らく、私たちはコロナの前の生活に戻ることはない（戻ってはいけない）と私は思っています。コロナ禍からの学びをこれからの社会構築にどう活かすか？今後も皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

○小川利佳

地域基礎科目・地域学副専攻の教科に携わり、8年目となりました。主に講義補助などの職務に就いています。昨年度は収束の兆しが見えないコロナ禍の中、学生たちの安全を確保しながらどうやって講義を進めていくかということが大きな課題でした。

特に担当教科には講義自体が人と人とを結びつける「場」の役割を担うものも多く、学年も学部も違う学生

が直接対話し、相談し合いながら学びを深めていくという講義本来の魅力が遠隔の講義では発揮されにくいいため、どうすれば遠隔の講義でも対面の講義と同じく雑多な関係を作り上げることが出来るのか、本当に頭を悩ませました。

しかしいざ、オンデマンドの講義を始めると動画の資料を何度も視聴できるので、その場で辞書を引いたり、検索をすることが出来、より理解が深まったという意見や、チャットにおいてのコミュニケーションは対面よりも緊張せず、話しやすかったと答えてくれる学生もあり、私たちが考えるよりも学生は柔軟にこの状況を捉えており、たくさんの可能性があることを教えてくれました。

この不自由な時間がいつまで続くかは分かりません。しかし私も学生に習い、色々な可能性を模索し、広げていきたいと考えています。

○横大路まゆ

令和3年度から近江環地域再生学座の事務局員として関わらせていただいております。近江環地域再生学座は、地域資源を活用した、地域課題解決や地域イノベーションを興し、新しい地域社会を切り拓く人材の育成を目的とした教育プログラムです。民間企業、行政、NPO、自営業、大学院生など、多様な立場やスキルの方が共に学びを深めています。皆さん、自分の専門分野の勉強をしながら、またそれぞれ仕事をしながら、日々、意欲的に学ばれる姿に私も刺激をうけております。

近江環地域再生学座に関わらせていただくようになって、自分が毎日暮している身近な地域の問題なのに、いかに自分が知ろうとしていなかったのか、他人事であったのかを感じる機会が多くありました。一方で、地域のこと、これからの未来のことを考え、仕組みを作ったり、取り組んでおられる方や企業があることを知りました。私が感じたこと、知ったことはほんの一部で、自分自身知らないことがたくさんあります。受講生の皆さんの学びをサポートしながら、私自身も自分事として捉え、一緒に学びを深めていきたいです。

○西田智美

令和3年度から地域共生センターの事務局スタッフに加わり、まず初めに驚いたのは当センターには多種多様な人が訪れるということです。学内の学生はもちろんのこと、他大学の学生や高校生、社会人として学びに来る方、企業の方、行政の方などなど、まさに地域と共にある場所なのだ実感しています。

その中で私は、地域教育プログラム科目「地域共生論」のサポート業務に携わっています。1回生の必修科目なので、新入生約600人の学生と接することができ、学生自らが学びを深め成長していく姿を事務局の業務を通

して応援しています。

地域で活動する人、これから地域での活躍を目指している人から毎日パワーをもらいながら業務に取り組んでいます。



- S 滋賀県立大学は「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに
- D 誰一人取り残さない持続可能な社会を目指し
- G グローカルな思考と実践をもって
s 世界と地域の発展に貢献します

公立大学法人 滋賀県立大学
地域共生センター 年報2020

令和4年2月 発行
公立大学法人 滋賀県立大学 地域共生センター

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500
TEL 0749-28-9851 FAX 0749-28-0220
E-mail chiiki_koken@office.usp.ac.jp
HP <http://ccdp.usp.ac.jp>